

Title	伊藤仁斎の生涯と教育活動に関する素描
Sub Title	A brief description of the life and educational activity of Ito Jinsai
Author	山本, 正身(Yamamoto, Masami)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.111 (2004. 3) ,p.93- 144
JaLC DOI	
Abstract	In this paper I have attempted to describe the outline of the life and educational activity of Ito Jinsai. And to describe Jinsai's life I apply two methods to clarify the meaning of this attempt. One is that in this paper I have described Ito Jinsai's life on the basis of the unpublished manuscripts and documents which are in the Kogido Bunko at Tenri University, to the contrary so far many preceding studies described Ito Jinsai's life on the basis of the "Kogaku Sensei Gyojo" which was written by Jinsai's son Ito Togai. But recently the authenticity of "Kogaku Sensei Gyojo" has been suspected for some point. The other is that I have attempted to give this paper the significance of the basic materials to study Tokugawa educational history. So I divide Jinsai's life into four times from the viewpoint of the development of his thoughts and educational activities.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000111-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000111-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

# 伊藤仁斎の生涯と教育活動に 関する素描

— 山 本 正 身\* —

## A Brief Description of the Life and Educational Activity of Ito Jinsai

*Masami Yamamoto*

In this paper I have attempted to describe the outline of the life and educational activity of Ito Jinsai. And to describe Jinsai's life I apply two methods to clarify the meaning of this attempt.

One is that in this paper I have described Ito Jinsai's life on the basis of the unpublished manuscripts and documents which are in the Kogido Bunko at Tenri University, to the contrary so far many preceding studies described Ito Jinsai's life on the basis of the "Kogaku Sensei Gyojo" which was written by Jinsai's son Ito Togai. But recently the authenticity of "Kogaku Sensei Gyojo" has been suspected for some point.

The other is that I have attempted to give this paper the significance of the basic materials to study Tokugawa educational history. So I divide Jinsai's life into four times from the viewpoint of the development of his thoughts and educational activities.

---

\* 慶應義塾大学文学部教授（教育学）

## はじめに

伊藤仁斎(1627-1705)の生涯を描いた著述は決して少なくない。例えば、明治以降の主要なものだけでも、①竹内松治『伊藤仁斎』(裳華書房, 1896年)、②井上哲次郎『日本古學派之哲學』(富山房, 1902年)、③増澤淑『伊藤仁斎と其教育』(明治出版, 1919年)、④加藤仁平『伊藤仁斎の學問と教育』(目黒書店, 1940年)、⑤石田一良『伊藤仁斎』(吉川弘文館, 1960年)、⑥吉川幸次郎「仁斎東涯学案」(日本思想大系 33『伊藤仁斎・伊藤東涯』岩波書店, 1971年, 所収)、⑦貝塚茂樹「日本儒教の創始者」(日本の名著 13『伊藤仁斎』中央公論社, 1983年, 所収)、⑧伊藤倫厚『伊藤仁斎・附伊藤東涯』(明德出版, 1983年)、⑨三宅正彦『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』(思文閣, 1987年)、などの諸述作を挙げることができる。

これらの諸述作は、資史料の取り扱いにおいて二つの異なる立場のものに分類することができる。その一つは、仁斎の伝記資料として嫡子東涯の著した「先府君古學先生行状」<sup>(1)</sup>(以下「行状」と称す)を最重要視し、これに基づいて仁斎の生涯・事績に関する記述を展開するもので、上記の①②⑥⑦⑧がこれに相当する。もう一つは、仁斎の生涯・事績を「行状」ではなく、仁斎の自著・草稿類などの史資料——それらは現在、いずれも天理大学附属天理図書館古義堂文庫(以下、古義堂文庫と略す)に所蔵されている<sup>(2)</sup>——に依拠して描こうとした著述で、上記の③④⑤⑨がそれである。とくに、⑨の三宅の著述は、仁斎の自著・草稿類と「行状」との内容異同の詳細な分析を通して、「行状」が必ずしも正確な史実を伝えているわけではないことを実証するとともに、「行状」のみに依拠する仁斎の伝記叙述を最も徹底的に批判した。

こうして、今日私たちが仁斎の生涯を把握しようとするとき、「行状」を根本史料としてそれを描いた諸述作に学問的信頼を寄せることは、すで

に適切ではなくなっている。仁斎の伝記叙述は、「行状」ではなく、「行状」の成立根拠となった仁斎関係資史料を第一次史料として行われなければならないからである。ただし、上述③の増澤淑『伊藤仁斎と其教育』は、仁斎の伝記叙述についていえば概述の域を出るものではない。④の加藤仁平『伊藤仁斎の學問と教育』も、仁斎の生涯よりもむしろ私塾古義堂の通史を叙述したものと評すべきであり、その意味で、仁斎の生涯に関わる記述は必ずしも豊かではない。また、⑤の石田一良『伊藤仁斎』は、仁斎の生涯を最も詳細かつ系統立って描いた労作といえるが、当時の社会状況や文化的背景の中に仁斎の生涯を位置づけるという全体的な視点に立っているため、例えば仁斎の塾活動の様子を描くというような個別的な記述に若干の物足りなさを感じさせる。さらに、⑨の三宅正彦『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』は、伊藤家の家系や京都町衆としての仁斎の日常生活など、各々の個別的テーマに関する論考は詳細かつ精緻を極めているが、必ずしも仁斎の生涯全体を描こうとするものではない。

以上のことを踏まえ、本稿では、次の二点を論考の着眼点に据え、今改めて仁斎の生涯を描くことの意味をそこに求めることにした。すなわちその一つは、資史料の取り扱いについて、「行状」は仁斎の生涯の大筋をとらえるために利用することとし、その細部に関する記述は古義堂文庫所蔵の仁斎関係資史料に基づいて行う、ということである。そして、仁斎関係資史料の取り扱いについて具体的には、①伊藤家の家系や仁斎の家族に関わる事項については、『家世私記』『伊藤氏族図』『家系略草』（いずれも伊藤東涯の自筆本）などを根本史料とする、②仁斎の事績については、なるべく仁斎の自著（例えば、『仁斎先生文集』や『古學先生文集』所収の諸著述。なお『古學先生文集』については、以下、『文集』と略称する）を使用し、しかも記された年代が当該事績に最も接近しているものを最も重要視する、③仁斎自著以外の資史料としては、東涯や梅宇の著作（例えば『<sup>かつしんろく</sup>盍簪録』や『見聞談叢』など）を二次的資料として使用するが、原念斎

『先哲叢談』や湯浅常山『文會雜記』など江戸時代に通行した伝記・随筆類はあくまでも参考資料と見なすにとどめる、などの基本方針を立てることにする。

もう一つは、仁斎の生涯を眺める視点として、彼の塾活動や教育活動に重大な関心を払い、この意味において、本稿が江戸教育史研究のための一資料としての意義を持ち得るようなものにする、ということである。そのため、仁斎の生涯の叙述については、何よりも彼の思想形成および教育活動の進展といった側面に注目し、①仁斎が本格的な修学を開始するまでの「幼・少年期（十五，六歳まで）」（寛永四〈1627〉年～寛永十八，九〈1641-2〉年頃），②朱子学に傾倒しつつも徐々にそれに疑問を抱き，学問上の苦闘を続ける「青年期（十五，六歳から三十五，六歳まで）」（寛永十八，九年頃～寛文元〈1661〉年頃），③塾活動を開始し独自の学説の形成へと始動した「壮年期（三十五，六歳から五十歳前後まで）」（寛文元年頃～延宝四〈1676〉年頃），④最も充実した学究活動を繰り広げるとともに独自の学説の確立を追究し続けた「熟年期（五十歳前後から七十九歳まで）」（延宝四年頃～宝永二〈1705〉年），の四つの時期に区分することにする。

## 1. 幼・少年期（十五，六歳まで）

まず、伊藤家の家系について簡単に確認しておこう。「行状」は、仁斎に至るまでの伊藤家の系譜を次のように伝えている。

先君子，諱維楨，字源佐。初の名維貞，字源吉。幼名源七。姓は伊藤氏。其の先世泉州堺津に住す。高祖道慶諱某，妣某氏。曾祖了雪諱某，妣某氏。祖了慶府君諱長之，妣榎本氏空心居士直治の女，久保氏大原の人某の女。府君本姓長澤氏，攝州尼が崎に居し，曾祖君の家に養はれ，遂に伊藤氏を冒す。元龜天正の間，攝泉二州の間大に亂れ，閭里靖ならず。遂に京師に遷り，近衛の南堀河の東街に住す。廢著し

家を作こす。考了室府君諱長勝、字七右衛門、妣壽玄孺人、里村氏法眼玄仲の女なり。男三人有り。先君子其の長子なり。寛永四年、丁卯秋七月二十日甲申午の刻、先生堀河の宅に生る。

これによれば、伊藤家祖先の名が具体的に伝わるのは、仁斎より四代前の道慶からであり、以後、曾祖父了雪、祖父了慶、父了室の名が続いている（『家世私記』『伊藤氏族図』『家系略草』などの記述もこれと同様である）。伊藤家の出身地について、「行状」は「其の先世、泉州堺津に住す」と記しているが、これに関してはすでに石田一良や三宅正彦により、摂津尼崎説と和泉堺説の二つがあることが明らかにされている<sup>(3)</sup>。すなわち、曾祖父了雪が、『家系略草』では「和泉州堺津に住す」と記されている一方で、『伊藤氏族図』では「是れは之れ尼崎の人」と注記されているのである。石田や三宅によれば、輶斎（伊藤家六代当主）の『伊藤家系譜』など後代の史料では堺説に統一されていくのであるが<sup>(4)</sup>、両説の真偽を確定することは困難である。なお、仁斎の祖父了慶は長沢家より伊藤家に養子に迎えられた人であったが、長沢家の出身についても、『家系略草』では「摂津國尼崎に生まる」とされながら、その一方で『家世私記』では「泉州堺邑に居す」と記されており、これまた二説に分かれている<sup>(5)</sup>。

いずれにせよ、伊藤家はこの了慶の時に京都に移る。その理由を「行状」は、「元龜天正の間、攝泉二州の間大に亂れ、閭里靖ならず」と述べているが、これは『家系略草』の「時に摂泉の間、兵禍相ひ仍<sup>かさ</sup>なり、人生業を失ふ」という記述とも符合しており、ほぼ事実と見なされる。ただし、問題は「廢著し家を作こす」ということである。「廢著」について『廣漢和辭典』には、それが「廢居」と同意であるとした上で、「一説に、廢は出して売ること、居はたくわえること」<sup>(6)</sup>とある。『先哲叢談』が「家素賈<sup>もと</sup>を業とす」<sup>(7)</sup>と伝えるように、伊藤家は京都堀河の地にて何らかの商いを生業としていたものと推定される。これに関し、井上哲次郎は

「材木を鬻ぐを以て業となし」<sup>(8)</sup>と紹介しているが、伊藤家が材木商を営んでいたことを証拠立てる史料は発見されていない<sup>(9)</sup>。

さて、仁斎は寛永四(1627)年七月二十日に、伊藤了室とその妻壽玄の長男として生まれた。了室も壽玄も生前に受けた仏式の法名であり、諱はそれぞれ長勝(字は七右衛門)と那倍であった<sup>(10)</sup>。父長勝は、仁斎の回想に従えば、朱子の『四書集註』や『朱子語録』<sup>マツ</sup>『四書或問』『近思録』『性理大全』等の書を所持していたと考えられ<sup>(11)</sup>、石田一良が指摘するように「貴族的な教養への愛着をもっていて、儒学についてもいくらかの理解のあ」<sup>(12)</sup>る人物であったと推測される。母那倍は連歌師として名高い里村氏の出身であるが(東涯の異母弟である梅宇の『見聞談叢』には、那倍の祖父里村紹巴<sup>しょうは</sup>について、「豊大閣も信仰度々發句あり。後に連歌天下の宗匠となれり。居宅下長者町堀河東へ入る南がわにあり」<sup>(13)</sup>と記されている)、那倍の母は京都の豪商角倉了以の弟で医師吉田意安の娘であった。また那倍の姉は京都の医師として名高い大須賀快庵に嫁ぎ、那倍の妹も当時の京都における有名な蒔絵師の田付常堅<sup>たつけじょうけん</sup>の妻となっている。このような仁斎の生育環境について、石田一良は

源七の幼い魂に強い影響を与えたものは、父方よりはむしろ母方の親族であった。先の父方の親戚が殆んど町人の世界にあったのに対し、母方の親戚は当時の京都において公卿・富商の間を周旋する高級文化人の世界にあったのである。…こうした生活環境からは、山鹿素行や荻生徂徠の学問のように「軍人」にして「政治家」である武士の学問はおそらく生れ得ないであろう<sup>(14)</sup>。

と指摘している。仁斎の思想形成を考える上で重要な指摘だと評すべきである。

ところで、幼少年期の仁斎に関する記述は少ない。「行状」もこの間の

仁斎の事跡を、

幼にして深沈競はず、常兒に異なること有り。甫<sup>はじ</sup>めて十一歳、師に就て句讀を習ふ。初めて大學を授かり、治國平天下の章を讀む。謂らく今の世亦<sup>かく</sup>許の如き事を知る者有るや。既にして稍詩を屬す。語を出すこと凡ならず。衆共に嘆異す。

と記すのみである。このうち「深沈競はず」という幼時の仁斎の性格について、これを確認するための有力な史料は他にはとくに見当たらない。後年に、仁斎の高弟北村可昌が「其の性や、寛厚和緩、憤怒<sup>あらは</sup>を見さず」（「古學先生伊藤君碣銘<sup>けつめい</sup>」、『文集』卷之首、所収）と評したような、あるいはまた『文會雜記』が荻生徂徠の言葉として伝える「仁斎ノ実徳ト、熊沢ノ才ト、予ガ學問ヲ合テ、聖人ガ出来スベシ」<sup>(15)</sup> という人物評に示されるような、道徳的に優れた仁斎という人物像は、おそらく幼少時からその片鱗を見せていたのであろう。

次に、仁斎の修学開始についてである。上記の「行状」には、仁斎が十一歳の時に修学を開始し、朱子『大学章句』を読んだことが記されている。ところがこれに対し、仁斎が二十七歳のときに書いた「敬齋記」には、

余髭鬣<sup>ししん</sup>従り、初めて斯道に志す有り。然れども俗學に困しみ、詩文に溺れて、進むを得ざる者、亦幾歳。幸に嘗て延平先生の書、文公小学の書を読んで、始めて大いに感悟す。是に於て平生の志、沛然として<sup>これ</sup>之能く禦ぐこと莫し。遂に定まる。（「敬齋記」、承應二年癸巳三月下寅日、『仁齋先生文集』、所収）

とある。それによれば、仁斎は「髭鬣」すなわち垂れ髪をして齒の抜けか



わるおおよそ七、八歳の頃から学問に志し、それから数年の後に「延平先生の書」（朱子が師事した李延平〔1093-1163〕の『延平問答』と思われる。ただし「行状」では仁斎が『延平問答』と出会ったのは十九歳頃のこととされている）と「文公小学の書」（朱子の編集による『小学』であろう）に巡りあい、そうして本格的な修学が始まったと述べられている。両者の信用度をめぐって三宅正彦は、「行状」の記述は「敬齋記」を受けて書かれたが、そこには記憶上伝聞上の誤りが生じていたのではないかと推定している<sup>(16)</sup>。

また、若き頃の仁斎が誰に学問を学んだかについて、東涯の『先游傳』は仁斎の姨夫である大須賀快庵の項目の中で「先子之に師事す」<sup>(17)</sup>と記し、梅宇の『見聞談叢』は松永尺五(1592-1657)にまつわる記事の中で「古學先生も若年の時、一兩度昌三子の講をきける由をの玉ふ」<sup>(18)</sup>と述べている。近年では、三宅正彦が十一歳の頃妙心寺などに通ったのではないかという説を示しているが<sup>(19)</sup>、詳細は不明といわざるを得ない。

いずれにせよ、「敬齋記」の「余髫髻<sup>ししん</sup>従り、既に斯道に志す有り」という仁斎の回想と、「行状」の「甫<sup>はじ</sup>めて十一歳、師に就て句讀を習ふ」という記述からすれば、仁斎はほぼ七、八歳の頃から文字を習い始め、十一歳前後から本格的な修学を開始したという想定が成り立つであろう。また修学開始期の仁斎が親しんだ書物には、『小学』『延平問答』『大学章句』などの名が挙がっているが、仁斎が少年期からすでに宋学の影響を受けていたことはほぼ間違いないであろう。

## 2. 青年期（十五、六歳から三十五、六歳まで）

こうして学問の道を志した仁斎ではあったが、その道は決して平坦なものではなかった。そもそも仁斎の当時、学問をすることで立身や家業が成り立つという社会状況にはなかった。それは仁斎自身が、「今の俗皆醫を貴ぶことを知つて、儒を貴ぶことを知らず。其の學を為すことを知る者

は、亦皆醫の計の<sup>ため</sup>為のみ」(「片岡宗純柳川に還るを送る序」、『文集』卷之一、所収)と語っている通りである。しかも仁斎の青年期にあって、伊藤家の家運はすでに衰えつつあった。それについて仁斎は、後年の回想で次のように述べている。

吾嘗て十五六歳の時學を好み、始て古先聖賢の道に志す有り。然り而して親戚朋友、儒の<sup>う</sup>售れざるを以て、皆曰く醫を為す<sup>よ</sup>利し。然れども吾が耳聞かざるが若くにして應ぜず。之を諫む者止まず、之を攻る者衰へず。親老い家貧しく年長け計違ふに至て、義を引き礼に據り、益其の養を顧みざるを責む。(「片岡宗純柳川に還るを送る序」、『文集』卷之一、所収)

あくまでも学問専念の初志を貫こうとする仁斎に対し、親戚も友人もそれは親を養わず家計を顧みないことだとして猛烈に反対する<sup>(20)</sup>。家運の衰えつつあった伊藤家にあって、その嫡男たる仁斎が生業につこうとしないことを放置するわけにはいかなかったのであろう(『伊藤氏族図』によれば、仁斎は九人兄弟〔七男二女と推定される〕の長男であったが、次弟の七左衛門は仁斎より十歳年少であった)。

この時期仁斎は、「我を愛すること<sup>いよいよ</sup>愈深き者は、我を攻むること<sup>いよいよ</sup>愈力む。其の苦楚の状、猶を囚徒の訊に就くがごとし。楚前に在り、吏卒傍に在り。迫促訊問、應ぜざることを能はず」(「片岡宗純柳川に還るを送る序」、『文集』卷之一、所収)という窮境に置かれる。その後の仁斎の儒学者としての歩みは、まさに「吾<sup>われ</sup>學を好むの篤き、志を守るの堅きを以て、而して後今に到ることを得」(同上)ということなのであった。

このように、家業の衰運とそれに伴う周囲の人々からの「迫促訊問」に苦しみながらも学問を続ける仁斎であったが、その学問も若き仁斎の心中の平穩を保証してはくれなかった。確かに若き仁斎は、朱子学に傾倒しそ

の修学の進展にそれなりの満足感を覚えていたようである。その様子を仁斎は、

余十六七歳の時、朱子四書を讀んで、窃かに自から以為らく是れ訓詁の学、聖門徳行の學に非ずと。然れども家に他書無し、語録或問近思録性理大全等の書、尊信珍重す。熟思体玩、積むに歳月を以てし、漸く其の肯綮を得。二十七歳の時、太極論を著し、二十八九歳の時、性善論を著し、後又心学原論を著し、備さに危微精一の旨を述す。自ら以為らく深く其の底蘊を得て、宋儒の未だ發せざる所を發すと。（『誠脩筆記』四十條）

と語っている<sup>(21)</sup>。「深く其の底蘊を得て、宋儒の未だ發せざる所を發す」という述懐には、朱子学説の真義を体得しえたとする仁斎の自負が滲み出ている。二十七歳から二十九歳にかけての頃の著作である「太極論」「性善論」「心学原論」の三者が、朱子学徒としての仁斎の真面目を伝えるものといえよう。

だが、やがて仁斎は自分自身の思想上の拠点を朱子学に置くことに不安を覚えるようになる。しかもこの不安は、仁斎を陽明学に接近させることになるが、それでも彼の思想上の動揺は治まることはなかった。上記の『誠脩筆記』において、仁斎は述懐を続けて

然れども心窃かに安んぜず、又之を陽明近溪等の書に求むるに、心に合ふこと有りと雖も、益<sup>ますます</sup>安んずること能はず。或は合し或は離れ、或は從ひ或は違ひ、其の幾回を知らず。（『誠脩筆記』四十條）

と述べている。

やがて仁斎は、「羸疾<sup>るるしつ</sup>」にかかり、家督を次弟の七左衛門に譲って、松

下町に隠居することになる。「行状」はその様子を

俄にして羸疾に罹る。驚悸寧からざる者、殆ど十年<sup>ばかり</sup>所、首を俯し<sup>つくえ</sup>几に傍り、門庭を出でず。左近の里人、多く面を識らず。其の與に語る所の者は、井上養白一人のみ。…宅を仲弟に附して、松下巷に<sup>しうきよ</sup>僦居して書を読む。間之を佛老の教に求む。嘗て白骨觀法を修す。之を久ふして山川城郭、悉く空想を現するを覺ゆ。

と伝えている。仁斎の隠居については、学問に専念するための隠居であったのか、あるいは病に罹ったための隠居であったのか必ずしも明らかではない。また、ここに伝えられる「羸疾」がどのような病であったのかも判然としていない<sup>(22)</sup>。だが、ともかくも仁斎は二十九歳前後にして隠居の身となる。この隠居生活中は、ほとんど家に閉じこもり、井上養白<sup>(23)</sup>ただ一人を学友とするような状態であった。しかも、この間の学問については仏教や道教に親しみ、さらには白骨觀法<sup>(24)</sup>にまで修行の手を伸ばした、というのである。

「行状」の「寛文壬寅京師地震、遂に家に還る」という記事に従えば、仁斎の隠居生活の期間は明暦元(1655)年頃から寛文二(1662)年頃までのほぼ八年間に及ぶ。年齢にして仁斎二十九歳から三十六歳にかけてのことである。周知の通り、仁斎が彼独自の思想体系を形成するようになるのはその帰宅・開塾後のことであるが、それにはこの隠居生活期間中の学問修養が重要な転機となっていたはずである。その転機は上記のような仏教・道教・白骨觀法などの修養から得られたものではありえない。では仁斎は、どのような学問や学的態度をもって自らの学問の転機となし得たのか。

これまでにしばしば指摘されてきたのは、明の呉廷翰(1491-1559)の影響である。すでに江戸時代においても、太宰春台はその『聖学問答』に

において「明ノ末ニ吳廷翰トイフ者、吉斎漫録・甕記・櫛<sup>とく</sup>記ナドイフ書ヲ著シテ、程朱ノ道ヲ闢キシハ、豪傑ナリ。日本ノ伊藤仁斎モ、吳廷翰ガ書ヲ読テ悟ヲ開タリト聞ケリ」<sup>(25)</sup>と述べていたし、また那波魯堂の『學問源流』にも「仁齋父子ノ學ハ、明ノ吳廷翰ノ見識ニ本ヅキ、却テ吳廷翰ノ學ヲ人ニハ説カズ」<sup>(26)</sup>と記されている。両者の学説がどういう側面において近似しているかについては、井上哲次郎『日本古學派之哲學』に詳しいが（例えば、井上はその第一に、吳廷翰『吉斎漫録』の「天地の初め、一元氣のみ」という主張と、仁斎『語孟字義』の「天地の間、一元氣のみ」という主張とが、「一元氣説」において同一であることを指摘している）<sup>(27)</sup>、両者の思想内容が学説的に必ずしも一致するものでないことは、これまで井上を初めとして、竹内松次（前掲『伊藤仁斎』）、増澤淑（前掲『伊藤仁斎と其教育』）らによって力説されてきたところである。

仁斎学形成の契機として、宋・明等中国の学説からの影響をどう理解するについては、再三紹介している三宅正彦の研究が最も精細な論考を展開している<sup>(28)</sup>。三宅は例えば、明儒として上述の吳廷翰の他に羅整庵（1465-1547）を取り上げ、彼らと仁斎との思想連関について入念な検証を行っているが、結局両者の思想は仁斎学形成上の直接的契機にはなっていない、と指摘している。三宅が注目するのはむしろ、仁斎自身が「予古今の人物に三大賢を得。宗の明道程先生なり、范文正公なり、元の魯齋許先生なり」（「魯齋心法を刻するの序」、『文集』卷之一、所収）と評していた程明道（1032-1085）、范仲淹（989-1052）、許魯齋（1209-1281）との思想連関である。

ただし、仁斎がこの三者をもって「古今の三大賢」と評していることと、仁斎学が三者の影響を契機として形成されたということは、別の問題と見るべきである。周知のように、仁斎学の思想体系は「語孟二書を熟讀<sup>ぐわんみ</sup>翫味し、此を以て規矩繩墨<sup>し</sup>と為て、其の是非<sup>かんが</sup>を校へ、其の得失を覈に」（『童子問』卷之下、第二章）するという方法に基づいて形成されたもので

あった。また、仁斎学形成の転機に関する仁斎自身の認識も、

是に於て悉く語録註脚を廢して、直に之を語孟二書に求め、寤寐<sup>ごび</sup>以て求め、跬步<sup>きほ</sup>以て思ふ。從容體驗、以て自ら定むること有て醇如たり。是に於て知る、余前に著する所の諸論、皆孔孟と背馳して、反つて佛老と相隣す。（『誠脩筆記』四十條）

というものであった。「孔孟の意味血脉を識る」（『語孟字義』卷之上、序）という方法の採用が仁斎学形成の転機となったことはほぼ間違いない。問題は、上記の程明道らを仁斎が「古今の三大賢」と評したのは、彼らからこの方法を示唆されたからであるのか、それともこの方法に基づいて吟味した結果、彼らの学説が「孔孟の意味血脉」を継承するものと認められたからであるのか、という点にある。

残念ながら現時点において、これを断定するための有力な手掛かりは未だ得られてはいない。だが、管見の限り、程明道ら三名の所説の中から「孔孟の意味血脉を識る」という方法を説く主張はこれまで伝わってきてはいない。ともあれ、「首を俯して几に傍り<sup>つくえ</sup>、門庭を出でず。左近の里人、多く面を識らず」という苛酷な状況下での、ほぼ八年に及ぶ学問的格闘は、若き仁斎に自身の学問的立場の定立という「賜物」を授ける機会ともなった。仁斎の「羸疾<sup>るゐしつ</sup>」が、彼の強烈な学問的追究への願望（この願望とそれに対する親戚知己からの猛反対との狭間に、自身が置かれてしまったこと）によって引き起こされたものだとするならば、この罹病・隠居・孤独という厳しい状況を克服し得たものもまた、彼の強靱な学的意志と努力なのであった。

こうして「行状」は、次のように仁斎の帰宅・開塾の様子を伝えている。

寛文壬寅京師地震，遂に家に還る．是より先宋儒性理の説，孔孟の學に乖くを疑ふ有り．參伍出入，沈吟年有り，是に至つて恍然として自得す．略條貫に就く．乃ち謂ふ大學の書，孔氏の遺書に非ずと．及び明鏡止水，冲莫無朕，體用理氣等の説，皆佛老の緒餘にして，聖人の旨に非ずと．始て門戸を開き，生徒を接延す．來者輻湊して，戸屢常に滿つ．信ずる者は以て間世の偉人と爲，疑ふ者は以て陸王の餘説と爲．先生其の間に處て，是非毀褒，恬として問はず．専ら往を繼ぎ來を開して自ら任ず．時に年三十六，始めて論孟古義，及び中庸發揮を艸定す．又同志會を設く．夫子の像を北壁に掛け，鞠躬して拝を致し，退て經書を講説し，過失を相規す．又許氏月旦の評に倣ひ，人物を品第し，生徒を倡勵す．或は私擬策問して，以て書生を試し，經史論題を設けて以て文を課す．月ごとに率ひ以て常と爲．

ここには，仁斎は寛文二(1662)年五月に京畿地方を襲った大地震を契機として堀河の自宅に戻ったとある．だが，隱居していた長男が自宅に戻るということは，彼が伊藤家の家督相続者になったことを意味するはずである．この地震では二条城が損壊し方広寺の大仏が倒壊したということであるから<sup>(29)</sup>，仁斎の自宅も相当の被害にあったものと推測されるが，自宅の被災だけで家督相続が行われたと考えるのは不自然である．ここは，仁斎の次弟七左衛門が前年七月に死去していたとする三宅正彦の考証<sup>(30)</sup>に従って，次弟の死去も仁斎帰宅の重要な契機としてとらえておくべきであろう．

### 3. 壮年期（三十五，六歳から五十歳前後まで）

さて，仁斎は帰宅・開塾を転機として，これ以降彼独自の思想体系の構築に邁進することになる．そしてこの学的営為は，彼の死に至るまで倦むことなく継続されていくのである．その最初の踏み出しは，上述の「行

状」にも記された「同志会」の開設であった。

「同志会」は、仁斎が帰宅する前年の寛文元年より設立の準備が行われていた。すなわち、寛文二年五月の「同志會籍申約」には

去年冬間、同志嘗て某の所に會し、相共に議して曰く、朋友の間、孰<sup>しばしば</sup>か數 相晤會して、其の得る所を證することを欲せざらんや。然り而して契闊阻絶、毎に其の交歡を聲<sup>けつかつ</sup>くすこと能はざる所以の者他無し。亦た迂途の阻、雨雪の妨に由る。加うるに世事多故を以てするのみ。若し為に會約を設け、嚴に課状を立て、極論熟講、其の同異を一にするに非ずんば、則ち吾輩日に荒蕪に就き、學遂に成立の日無からん。盍ぞ各<sup>おのおの</sup>盟約を締む、平生の素志を成さざらんや。是に於て同志皆會に預からんことを願ふ。（「同志會籍申約」、『仁齋先生文集』、所収）

と、寛文元年の冬に同志会設立に向けての協議が行われていたことが記されている。このことから、仁斎の隠居生活もその終期には「其の與に語る所の者は、井上養白一人のみ」という状況を脱し、学問を志す人々たちによるそれ相応の学問交流の機会が得られていたものと推測される。実際、仁斎は、寛文元年十一月二十一日付の文書「書齋私祝」にて、

予や閒居無事、幸に朋友の過從を蒙る。何の幸か之に如かんや。予極めて不似と雖も、竊かに斯道に志有り。端<sup>まさ</sup>に此間に及んで相共に講磨切勵、上聖人君子の道に進まんことを欲す。故に一二條陳じて、以て教を諸同志に請ふて云ふ。（「書齋私祝」、『仁齋先生文集』、所収）

と語っているのである。仁斎がその自宅を開いて私塾を営むようになったのは、寛文二年のことであろうが、同志会という研究サークルの事実上の発足は、その前年の寛文元年とみてよいであろう。



では、その同志会とは具体的にどのような組織であり、またそれはどのような形で運営されていたのか。

まず上述の「同志會籍申約」(『仁齋先生文集』, 所収)の中から会の運営に関わる記述を見ると、

是に於て弊廬<sup>へいろ</sup>を以て、定めて會聚の所と爲<sup>し</sup>、各一茗一果<sup>おのおの もたら</sup>を齎<sup>もたら</sup>し、會日の具と爲<sup>し</sup>、其餘を設くることを許さず。大凡毎月三會にして止む。若し事有れば、則ち一二會にして止む。公事<sup>および</sup>暨父母の事有て、會に赴くことを得ざる者は、期に<sup>さきだつ</sup>先て之を會長に告ぐ。會長又他日を<sup>ぼく</sup>卜して之を定む。私務遊觀を以て、會に赴かざることを許さず。

とある。ここには、①弊廬<sup>へいろ</sup>すなわち仁斎の自宅をもって会集所とする、②会集の日には、会員がそれぞれに茶と菓子を持ちよる、③会合は毎月三回を原則とするが、事情によっては月一、二回のこともあり得る、④会員の中に出席の都合のつかない者が生じた場合には、會長が会集の日を占いで定める(「私務遊觀」による欠席は認めない)、などのことが記されている。

次に、同じく寛文二年五月に著された「同志會の式」(『文集』卷之六, 所収)には、同志会の運営の様子が一層具体的に記されている。少し長くなるが、以下にその全文を引用する。

凡そ會日、主人先づ至り、室内を掃除し、然る後歷代聖賢道統圖を北壁の上に掲げ、左を以て講者の座と爲<sup>し</sup>、右を贊者の座と爲<sup>し</sup>、會約を讀むを掌る。衆中必ず一人を推して、會長と爲<sup>す</sup>。衆畢く至る。各齒<sup>ことごと おのおの し</sup>を以て序を爲し、先聖先師の位前に詣り拜を設く。鞠躬、拜興、拜興、拜興、拜興、平身。畢る。贊者立て、先聖先師の位前に至り、<sup>きはい</sup>跪拜す。俯伏、興、拜興、拜興、平身。會約を取り、座に就き讀み過ぐ。衆皆肅容す。贊者又其

の意を承け、略學<sup>ほぼ</sup>を爲すの要を説く。畢る。衆皆拜を致し、贊者答拜す。既にして又會約を取り、之を先聖先師の位前に置き、拜し退く。儀節前の如し。後講者拜も皆此に同じ。是に於て衆中講者を進めて、座に陞<sup>しょう</sup>せんことを請ふ。講者起て先聖先師の位前に至り、拜を致す。然る後座に陞<sup>しょう</sup>し、書を講じ、畢る。衆皆拜す。講者亦拜す。而る後衆<sup>おのおの</sup>各疑ふ所を質問す。若し其の答ふる所、意義通じ難く、稍<sup>やや</sup>其の理を失ふ者、會長又之が爲<sup>ため</sup>に折衷す。講論既に畢つて、講者<sup>みづか</sup>自ら書を収めて退く。衆復た次の講者を進めて、座に陞<sup>しょう</sup>せんことを請ふこと初の如し。衆講共に畢つて、而る後會長又策問、或は論題を出して、諸生を試む。諸生<sup>おのおの</sup>各其の論策を呈す。會長之を取り、略轉語を下し、或は批評を著して之を與へ、甲乙を著けず。若し即ち答ふること能はざる者、次會を俟て出すも、亦聽<sup>ゆる</sup>す。講論の間、最も嬉笑遊談、人の聽聞を駭かし、及び大に扇<sup>ふる</sup>を揮ひ、座中に喧聒<sup>けんかつ</sup>するを禁ず。且つ一切世俗の利害、人家の短長、及び富貴利達、飲味服章の語、最も當に誠むべし。大凡會中、講義論策、<sup>おのおの</sup>各一冊と作し、共に數人を輪して繕寫す。又會中問答、經要を發明する者、及び學問<sup>こうけい</sup>屑<sup>くせ</sup>の語、皆謹んで録す。衆人相共に校定し、別に一冊と作す。其の聖經に鑿<sup>さく</sup>り、及び膚淺切實ならざる者、載せず。

以上の記述から、同志会運営の様子を順を追って整理すると、

- (1) 室内の掃除や歴代聖賢道統図<sup>(31)</sup>の掲帖などの会場設営を主人が行う。講者は会場の左側に、贊者（儀式の介添え役）は右側に坐す。
- (2) 会員の中から一名を推薦して會長とする。
- (3) 会員全員が揃ったら、年齢順に歴代聖賢道統図に向かって拝礼の儀式を行う。拝礼が終わったら贊者が聖賢図<sup>きはい</sup>に謁拜し、會約を取り、席に戻って一読する。一同みな容儀を正す。贊者は學問の要諦を説明する。拝礼・答拜の後、贊者が會約を聖賢図の前に置き、拝して

退く。

- (4) 講者が座に昇って書を講ずる。一同拝し、講者も答拝す。一同それぞれの疑問点を質問する。講者の回答が不十分な場合には会長がまとめる。講書と議論が終われば講者は書を収めて退く。
- (5) 次の講者が講書を始める。その作法は上と同じ。
- (6) 各講者の講書が終わったら、会長が策問（諸生に対する質問）や論題を出す。諸生はそれぞれ策論を呈示し、会長がそれに対する感想を述べる。時には批評を書いて与えるが、序列はつけない。
- (7) 例会での議論と論策は各一冊にまとめ、数人に廻して繕写する。また例会での議論において、学問上重要であるとされた語は慎重に記録し、会員が相互に校定した上で別冊にまとめる。

というようにまとめることができる。

このように、同志会における学問研究のプロセスは、「講者による講義とそれに対する質疑応答」「会長による策問・論題の提示とそれに対する諸生からの回答」「議論に基づく冊子の作成」という手順を踏むものであった。当然に仁斎もまた、時には講者となり、会長となって会の運営に携わっていた。そして、このことが仁斎の思想形成に重要な意味をもったことは間違いない。

例えば、古義堂文庫所蔵の『文集』の仁斎生前最終稿本（全五巻、東涯刊行本の定本）には、仁斎の「策問」類が二十篇ほど収められているが、これらは、仁斎が同志会の会長を務めたときに諸生に提示したものと推定される。時期的には、寛文元（1661）年辛丑十二月十八日付のものから元禄十（1697）年丁丑春二月初五日付のものに渡っており、東涯も二十番目の策問の末尾に「寛文辛丑より元禄丁丑に至るまで凡そ三十餘年、問を設けて諸生を策す。其の間学問早晩の異同、亦概見すべし」（「私擬策問」、『文集』巻之五、所収）と記している。いずれも経書解釈や学説の真偽をめぐる問題に関して、諸生に「願はくは其の説を聞かん」「諸君以て如何

と為<sup>す</sup>」「以て之を篇に著せ」などと問うたものである。

これらの中でも重要なものに、寛文八(1668)年戊申春三月五日付の「私擬策問」がある。仁斎はこの策問の中で「子程子曰く、大學は、孔氏の遺書にして初學徳に入るの門なり」とする朱熹『大学章句』冒頭の言葉を踏まえつつ、『大学』の重視する「明德」や「格物致知」などの用語が孔孟の主張に認められないことを論じながら、『大学』が孔子の遺書かどうかについて「願はくは諸君明辨極論して、以て其の説を卒へよ」と問うている。仁斎の朱子学批判における記念誌的著作ともいえるべき「大學は孔氏の遺書に非ざるの辨」(『語孟字義』卷之下、所収)は、この策問に対する仁斎自身のいわば模範解答であったと見なしてよい<sup>(32)</sup>。

また、同上の『文集』には、仁斎の講義草案である「講義」類が十二篇ほど収められている。今それらを下記に示すと次の通りである。

「人の禽獸に異なる所以の者幾希の章の講義」(寛文二年壬寅孟春初六)

「牛山の木全章の講義」(寛文二年壬寅正月十九日)

「王の不智<sup>あやし</sup>を或むこと無かれの章の講義」(寛文二年壬寅仲春十八日)

「羿の人に射を教ふる章の講義」(成稿日不明、刊本では寛文三年癸卯二月念八日)

「仁は人の心なりの章の講義」(寛文二年壬寅三月四日)

「拱把の桐梓の章の講義」(寛文二年壬寅三月十三日)

「無名の指の章の講義」(成稿日不明)

「釣しく是れ人なりの章の講義」(寛文二年壬寅四月十一日)

「仁亦熟するに在りの章の講義」(成稿日不明)

「天爵人爵の章の講義」(寛文二年壬寅冬十一月二十三日)

「論語志學の章の講義」(寛文六年丙午八月念五日)

「諸友余が為に七裘を駕する宴集の講義」(元禄九年丙子四月廿二日)  
一見して明らかなように、この十二篇中、実に十篇が『孟子』の各章を

題材としており、残りが『論語』とそれ以外（元禄九年の「諸友余が為に七裘を駕する宴集の講義」のこと。ただしその内容は『論語』『孟子』に依拠している）から題材をとっている。仁斎の講義が寛文年間に集中していることは、同志会の発足当初は仁斎が講者を務めることが多かったことを窺わせるが、この時期の仁斎の思想関心が『論語』『孟子』に集中していたことも以上から知り得るところである。「行状」には、「時に年三十六、始て論孟古義、及び中庸發揮を艸定す」と記されているが、仁斎の代表的著作である『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』の起草作業は、まさに同志会の進展とその歩みをともしするものであったのである<sup>(33)</sup>。

なお、「行状」には同志会に関して「又許氏月旦の評に倣ひ、人物を品第し、生徒を倡勵す」という記述が認められる。これの具体的な規定は「同志會品題式」（『文集』卷之六、所収）に

- 一 言語法有り、學識正確なる者、之を上科に列す。
- 一 言語謹慎、行ひ稍忠實なる者、之を中科に列す。
- 一 才氣秀と雖も、言語浮躁なる者、之を下科に列す。

右大槩忠信を以て上と爲、私曲を下と爲。善と善とするは長を欲し、惡を惡とするは短を欲す。

右班氏人表三科九等の例に倣ひ、各諸友の姓名を列し、毎月初會、必ず其の品題を改む。

というように記されている。「同志會品題式」は『文集』には寛文二年壬寅夏五月朔旦の日付で収録されているが、その実際の成立は加藤仁平の考証に従って、寛文七(1667)年、仁斎四十二歳の頃であったと見るべきであろう<sup>(34)</sup>。

上述の「班氏人表三科九等」とは、いうまでもなく『漢書』卷二十の「古今人物表」を指すが、仁斎はそれに倣って諸生を上中下三科に分け、

さらにそれを各上中下の三科に分けるとともに、これを毎月初会に改めたというのである<sup>(35)</sup>。なお、「行状」にいう「許氏月旦の評」についてであるが、これは『後漢書』卷六十八の「郭符許列傳」中の許劭<sup>きよせう</sup>に関する記事、すなわち「初め、劭と靖と俱に高明有り、共に郷黨人物を覈論<sup>かくろん</sup>し、月毎に輒<sup>すなは</sup>ち其の品題を更<sup>あらた</sup>む。故に汝南の俗月旦評を有つ」<sup>(36)</sup>に基づくものと推定される。近世教育史上においていわゆる「月旦評」とは、広瀬淡窓(1782-1856)の咸宜園でのそれがよく知られているが、咸宜園の「月旦評」が一ヶ月間における課業や試業の得点という厳格な基準に基づくものであったのに対し<sup>(37)</sup>、同志会でのそれは「大槩忠信を以て上と爲、私曲を下と爲」というような道徳的評価を基調とするものであった。同志会の特性の一つをこの点に認めることができるであろう。

正確な年代は伝わっていないが、仁斎が緒方嘉那と結婚したのも同志会の活動が軌道に乗ったこの頃であったと推測される。『家世私記』所収の「先妣貞淑孺人緒方氏墓碑銘」(以下、「緒方氏墓碑銘」と略称)によれば、嘉那の父緒方元安は「法橋」<sup>ほつけう</sup>に叙位された医師であり、その母方の本家は旗本とされている。緒方氏の家柄を考えるならば、仁斎が嘉那を結婚相手に迎え得たことは、仁斎の塾経営が順調な進展を見ていたことを窺わせるものといえる。なお「緒方氏墓碑銘」は、嘉那について「正保三年(1646年、筆者註)丙戌江戸に生まる。長じて先君に歸す。子、夙に淑徳を稟け、克く舅姑に事ふ。…疾劇しきも尚を家務を幹理し、死生嬰懷<sup>おも</sup>を以はず」と記し、嘉那が重い病に罹っていたこと、それにも拘わらず家事に献身していたことを伝えている。『伊藤家系譜』によれば、嘉那の死は延宝六(1678)年、享年三十三歳であった(「緒方氏墓碑銘」は嘉那の死を延宝七年と伝えているが、頭注に「延宝七年は延宝六年の誤り」という書き入れがなされている)。

また、寛文十(1670)年四月には嘉那との間に嫡男東涯が誕生する<sup>(38)</sup>。仁斎四十四歳の時のことである(なお、仁斎と嘉那との間には、長男東

涯、長女くす、次女しゆんの三人の子どもがあった)。「行状」が「來者輻湊して、戸屢常に滿つ」と伝える塾の様子は、仁斎の学問活動が、当時の京都の文化人たちにおける知的交流世界の一翼を担っていたことを物語るものであるが、それは、結婚、第一子の誕生という人生の節目を迎えたこの時期に訪れた状況ではなかったかと推測される。

ところで、この時期における仁斎の学的姿勢を物語るエピソードの一つとして、明の遺臣朱舜水(1600-1682)に深く傾倒したことが挙げられる。仁斎は、柳川藩の藩儒安東省菴が長崎に亡命した朱舜水に師事し、財政的援助を行ったことを聞き知って、「承り聞く明國の大儒越中の朱先生、躬秦を帝とせざるの義を懷き來つて長崎に止む。…竊に衣を<sup>かか</sup>擣げて門下に相ひ従はんと欲す。然れども人子の孝、海に航して遠遊す可からずを以て、遂に果して往かず。…先生近く親藩の招を以て、將に武城に赴かんとす。僕又侍養人有るを俟て、往て先生に武城に従はんと欲す。知らず先生之を許すや否や。若し僕が爲に之を先生に言ふことを獲ば、實に大幸なり」(「安東省菴に答ふる書」、『文集』卷之一、所収)という書状を送り、舜水の東行を機に江戸に出て師事したいから、舜水にその旨打診してくれるように省菴に斡旋を求めたのである。この文書には日付は示されていないが、「近歳以來、偶一二の同志有り。相共に討論す」(同上)や「侍養人有る」(同上)などの文言からから、同志会の発足後、母那倍の療養中の時期であったことがわかる(なお、当時の同志会には安東省菴の弟子片岡宗純が加わっていた)。塾の経営や母の看病という現実的な問題に直面しながらも、「直に鄒魯の的傳を受」(同上)けることを切望する仁斎のひたむきな姿勢がここに表われている。もちろん、仁斎のこの願いは果たされなかったが、石田一良の指摘によれば、仁斎は書状を通して、自身の文章批評を舜水に仰いでいたようである<sup>(39)</sup>。

その後の仁斎に関する事跡について、「行状」は次のように、三つの不幸な出来事を伝える。

延寶癸丑五月、京師大に火あり。先生災に遭ひ、京極大恩寺に<sup>けうきよ</sup>僑居す。是より先母<sup>かくえつ</sup>孺人<sup>かくえつ</sup>膈噎を患ふ。奉養愼至、引て三年に至る。時細川越中侯幣召す。侍養人無きを以て辭す。是歳七月十一日、孺人遂に<sup>けうきよ</sup>僑居に終す。終に臨んで合掌作禮、先生孝養の篤を謝す。視る者感涕す。先生<sup>き</sup>椿の喪に服す。是歳越藩の大安侯、其の名行を<sup>つつしん</sup>欽で、將に使幣海物を致さんとす。左右言く源吉方に母の喪に居れり。甘旨の味、恐らくは<sup>き</sup>冝嘗せず。侯の曰く獨り父の在す有らずや。乃ち之に賜て祖考に供せ使む。冬に及んで宅成る。越て明年九月十日、了室府君亦卒す。喪に服すること前に通じて凡そ四年と云ふ。

すなわちその一つは、延宝元(1673)年五月の京都の大火災である。これにより、仁斎の自宅も罹災し、京極大恩寺に僑居することになった。この時の様子を、東涯の『<sup>かつしんろく</sup>盍簪録』は「寛文癸<sup>みづのとうし</sup>丑（寛文年間に癸丑の年は存在しないので、延宝癸丑の間違いと思われる。筆者註）の夏、京師大火、予が舎に延及し、百物蕩燼す。先人他物を携へず、唯古義草本一部を<sup>たく</sup>囊して逃る」（卷之二、紀實篇）と伝えている。おそらくこの時、種々の稿本や蔵書が灰燼に帰してしまったことであろう。このとき仁斎は四十七歳であった。

二つ目は、母那倍の死である。『家系略草』には「是れより先、<sup>かく</sup>孺人<sup>かく</sup>膈を患ふ。兼ねて今歳京師大火、暫く大恩寺に寓し、遂に終る。寿六十五」と記されているが、京都を大火が襲ったこの年、実母が大恩寺の仮住まいにて亡くなる。なお、「行状」にある、仁斎が熊本の細川侯から藩儒に招聘されたが母の看病を理由に辞退したというエピソードは、『先哲叢談』にも「肥後侯、禄千石もて之を招く。辭するに母老い侍養するに人無きを以てす」<sup>(40)</sup>と記されている。

そして三つ目が、父了室（長勝）の死である。これについて『家系略草』には、「延宝二年甲寅九月十日、堀川宅に終る。寿七十六。嵯峨二尊



院に葬る」と記されている。母那倍を亡くした翌年のことである。「行状」の「冬に及んで宅成る」との記事にあるように、前年に焼けた自宅はすでに再建されていたが、両親との相継ぐ死別を迎えた仁斎の悲しみは想像に難くない。こうして仁斎は、足掛け四年の喪に服することになる。

なお、上述の同志会がいつ頃まで存続したのかは必ずしも明らかではないが、おそらくこの服喪期間中（1673-1676年）に中断し、そのまま途絶えてしまったものと推測される<sup>(41)</sup>。ただし、仁斎はこの期間中に同志会での研究成果を筆録している。『文集』巻之五に収録されている「同志會筆記」四十八條がそれであるが、その最古稿本は『誠修筆記』（全五十一條、削除分三條を含む）という独立の書冊であった<sup>(42)</sup>。

#### 4. 熟年期（五十歳前後から七十九歳まで）

両親の喪が明けた延宝四（1676）年の十月、仁斎は塾の活動を再開する。年齢はすでに五十歳を迎えていた。だが、これ以後仁斎はその生涯の中で最も充実した学究生活を送ることになる。それについて「行状」は、

丙辰の歳に及んで服闋<sup>や</sup>む。十月始めて論語を開講す。月ごとに三八日を定む。是自り論孟中庸の三書、反覆輪環し、終つて復た始む。傍ら易大學近思錄等の書に及ぶ。教授倦まざる者、四十餘年。…名望日に隆ん、遠邇に達す。搢紳家左<sup>むなしく</sup>を虚して待を以てす。乃至士庶の往來して京に過ぐす。稍志有る者、有學無學を問はず、一たび其の面を識り一たび其の講を聴くことを願はざること莫し。道要を叩問し、疑難を質正し、虚にして往き實にして歸す。歎服せざること莫し。刺を投じて來謁する者、録に著るゝこと凡そ三千餘人。

と記している。塾の再開とともに仁斎の名望が日ごとに高まり、その門を叩く者が賑わしくなっていく様子が窺い知れる。ところで、塾再開後の仁

斎の講義活動について、ここには、毎月三の日と八の日を定め、『論語』『孟子』『中庸』の三書を中心に反覆輪環し、その傍ら『易』『大学』『近思録』などに及んでいたと述べられている。だが実は、この時期における仁斎の講義活動の様子は、仁斎自身の日記記事を通してより具体的かつ鮮明にこれを知ることができる。以下、それについてやや詳しく見ていくことにする。

仁斎の日記は、天和二(1682)年七月朔日から同三年六月晦二十九日までのことを記した『日次之覺帳』と、天和三年七月朔日から同年十二月晦三十日までのことを記した『日次』の二冊が古義堂文庫に現存する(以下、この二冊を『日記』<sup>(43)</sup>と称す)。仁斎五十六、七歳の頃の記事である。それによれば、仁斎の講義活動は、大きく「講釈」「輪講」「訳文」の三つに分類することができる。

まず「講釈」であるが、これは上述の「行状」の記事にあるように、毎月三の日と八の日に行われていた。『日記』によれば、仁斎は天和二年七月末から九月にかけて重い病を患ったが、その療養期間を除いて、『孟子』の講釈が毎月三の日と八の日に規則正しく行われている。『日記』における『孟子』講釈の初出は天和二年七月三日で公孫丑章句下篇の講釈が行われ、翌三年十一月十三日に尽心章句下篇の講釈を終えている。この三、八の日の講釈は同年十一月二十三日より『中庸』に移っている。なお、『孟子』『中庸』の他には、『性理字義』の講釈が、天和二年十二月七日から翌三年九月六日まで、原則として毎月六の日に実施されている。

仁斎の講釈は、これら自宅で行われる定例のもの以外に、ある門人一人を相手にする個人教授、門人や知友に招かれて講釈に出かける出講、あるいは町会所を借りてそこで行われる「会所の会」など、多様な形態をとっていた。例えば、個人教授としては、天和三年六月二十日から八月十五日までの十回に及ぶ『春秋經傳通解』の講釈は門人中嶋恕元を相手に行われている。また、出講としては門人宅での講釈(例えば、天和二年十二月十

五日および同三年十月五日の坪内藤七郎宅での『中庸』講釈)の他に、九条家や西園寺家といった公家に招かれての『論語』講釈もかなりの頻度で行われている(例えば、九条家へは天和三年五月二十八日から、七月六日、八月六日、九月十六日、十一月二十三日と、講釈に出かけている)<sup>(44)</sup>。なお、「会所の会」については後述する。

次に「輪講」であるが、これは基本的に門人たちに講釈を担当させるもので、『書経』の輪講が最も規則的で、天和二年十月二十二日以降ほぼ毎月二と七の日に行われている。これ以外には、『春秋』の輪講が毎月四と六の日に行われ、天和三年十月十四日に終了している(四、六の日以外に行われることもあった。また、『春秋』の終了後には引き続き『周易』の輪講が行われている)。また、同三年九月十四日からは毎月四、九の日に『大学』の輪講が始まっている他、『近思録』や『詩経』などの輪講も数度行われたことが記されている。このように、輪講はいわば一つの講座だけが行われたのではなく、複数のテキストを対象に複数の講座が併行して開かれていた。それゆえ、ひと月の実施回数はかなりの頻度に上っていたはずである。仁斎は、『日記』に輪講の担当者名を丹念に記入しているが、時には担当者名が空白になっている場合もある。この場合、おそらく仁斎は欠席して門人たち任せていたものと推測される。

三つ目の「訳文」は、『日記』に従えば、天和二年十月二十一日以降、毎月一の日に行われている。これも門人たちが担当するものであるが、その内容は、例えば天和二年十一月一日の記事に「今日譯文唐苑宗論、巡譯韓退之重答李翊子、譯者野口玄光」とあるように、主に唐宋時代の漢文を材料としてこれを書き下し、その書き下し文を漢文に復元し、これを原文と対照させる、というものである。これは、「行状」が「又譯文會を創め、國字を以て古文を換寫し、學者に與へて、復するに漢字を以てし、其の添減順逆の別を校へて、以て文法を諳ず。甚だ初學の弘益爲り」と伝える通りである。仁斎独特の漢文学習法に基づく演習形式の授業であったといえ

る。

なお、前述の「会所の会」について、若干の言及を加えておく。『日記』によれば、例えば、天和二年七月には「晝、會所へ出。孟子古義之講尺有之候」(三日)、「會所へ侍從殿御出、孟子古義之講尺、某之論語古義之講尺」(六日)、「晝、會所にて孟子の古義の講釈有之。孟子皆相濟候」(八日)、というように会所での講釈が集中して行われている(なお、二十六日にも「會所之講尺、拙者腹中氣故延引」という記事が見える)。いずれも『孟子古義』や『論語古義』の講釈が、仁斎自身あるいは門人たちによって行われていたようであるが(その意味では輪講と見るべきかもしれないが)、六日には侍從殿すなわち公家の勘解由小路韶光が講釈を担当している。「会所の会」は、天和二年七月以外では同年末に最も頻繁に開催されており(十一月十四日、十九日、十二月四日、十一日、十四日、十九日の六回)、いずれの会も『論語』述而篇の講釈が行われていた。ただし、論孟の講釈を中心とするものであったことと、いわば短期間での集中講義という傾向があったこと以外について(例えば、会所を利用した理由や、自宅での講釈との相違など)は、不明な点が少なくない。

これに関し、武田明子の研究によれば、十七世紀中期以降の京都ではほとんどの町に町会所が存在し(それは都市支配を目的とした所司代牧野親成の法令が直接的要因であったものの、本来は町の自治運営上の必要から成立したものであった)、その機能は、①町政事務、②共有財産の保管、③寄合、④社会儀礼、⑤年中行事・文化、⑥教養の伝承、⑦髪結床など多岐にわたっていた、とされる。仁斎の「会所の会」での講釈も、こうした京都の文化的伝統や文脈の中で理解されるべきものであろう<sup>(45)</sup>。

さて、以上のような「講釈」「輪講」「訳文」から成る仁斎の講義活動は、ひと月にどの程度の頻度で行われていたのだろうか。これを仮に『日記』が記された期間(天和二年七月から同三年末まで)の中間地点に相当する天和三(1683)年の三月で見ると、

朔日　： 訳文会  
二日　： 『書経』 輪講  
六日　： 『春秋』 輪講, 晩に『性理字義』 講釈  
七日　： 『書経』 輪講  
八日　： 『孟子』 講釈, 夕飯後『中庸發揮』 講釈  
十二日： 『書経』 輪講, 『春秋』 輪講, 訳文会  
十三日： 『孟子』 講釈, 夕飯後『中庸發揮』 講釈  
十四日： 『春秋』 輪講  
十六日： 『春秋』 輪講, 『性理字義』 講釈  
十七日： 『書経』 輪講  
十八日： 『孟子』 講釈, 夕飯後『中庸發揮』 講釈  
二十日： 『春秋』 輪講  
廿一日： 夕飯後に訳文会  
廿二日： 『書経』 輪講  
廿三日： 『孟子』 講釈, 夕飯後『中庸發揮』 講釈  
廿四日： 『春秋』 輪講  
廿七日： 『書経』 輪講, 晩に『性理字義』 講釈  
廿八日： 『孟子』 講釈, 夕飯後『中庸發揮』 講釈  
廿九日： 『中庸』 輪講  
三十日： 『春秋』 輪講

となっている。仁斎の講義活動がかなりの頻度で行われていたことがわかる（なお、三日には、仁斎宅に七十七人ほどの「礼者」が訪れていた。正月・端午・七夕など、節句の折はいつもこの種の行事が行われていた）。講義活動の時間帯についても、この月の『中庸發揮』講釈のように夕食後に開かれるものもあったが、例えば、天和二年七月八日のように、朝飯後に『孟子』の講釈を行い、続いて訳文会を開き、昼に会所にて『孟子』を講釈する、というような過密なスケジュールが組まれることもあった。い

ずれにせよ、この時期における仁斎の塾活動は極めて精力的なものであったといえよう。

ところで、この日記の書かれた天和二年当時、仁斎はすでに再婚していたものと考えられる。先述のように先妻の嘉那の死は延宝六(1678)年、仁斎五十二歳の時のことであったが、『日記』における天和二(1682)年七月三日の記事には、「午前内室及くす、<sup>ふさ</sup>ちゆん、妙心寺牧右衛門殿へまいり、初夜前ニかへり」とあり、内室すなわち後妻<sup>ふさ</sup>総のことが記されているからである（なお、この記事には仁斎と先妻嘉那との間に生まれていた長女くす、次女しゆんの名前が見えている）。仁斎と総との結婚年月日は未詳であるが、『家系略草』の「萬治戊戌（萬治戊戌は1658年である。筆者註）五月望生まる」という記事に従えば、天和二年のこの年、総は二十五歳ということになる（なお、総の没年について同書には「寛保辛酉十一月十一日歿。壽八十四。二尊院に葬る。子男四人女一人」とある。1741年のことである）。

総は、もと丹波園部藩の家臣中川彌左衛門の娘であった。彌左衛門について、梅宇の『見聞談叢』には「園部につかへる時中川彌左衛門と云つて、二百石の家禄にて兄の子五郎大夫を看坊しをれり。五郎大夫不行跡。侯よりいとま出でけるゆへ、わが外祖父もいとまをとれり。京にて妙心寺に居住。姓名を改、瀬崎豈哲と云ふ。貞享丙寅の歳七十四にて死去」<sup>(46)</sup>と記されている。園部藩を致仕した後、瀬崎豈哲と改名して京都妙心寺に住んでいたというのである。なお、上述の『日記』記事に見える「妙心寺牧右衛門殿」とは、豈哲の子瀬崎牧右衛門のことであるが、仁斎自筆の門人録である『諸生初見帳』によれば、この牧右衛門は天和二(1682)年に仁斎に入門している。

総の人となりについて、『家世私記』所収の「先祖妣惠茲孺人瀬崎氏碣銘」には、「既に長じて古學先生に帰す。賢慧勤敏、壺は則ち瑕けず。先生、方に古學を倡ふ。乃ち家政悉く孺人に屬す。先生をして<sup>ふくろう</sup>伏臘<sup>けん</sup>の歎を忘

れしむる者は、孺人の助に繋がる。東涯先生は緒方氏の出でにして愛護し親子を踰ゆ」と記されている。賢慧勤敏で家政を遣り繰りするとともに、先妻の子どもを慈育し、仁斎の学問を下支えした様子が窺える。なお、仁斎と総との間には、その後四男一女が生まれたが、この四人の男子、すなわち長英（字重蔵、号梅宇）、長衡（字正蔵、号介亭）、長準（字平蔵、号竹里）、長堅（字才蔵、号蘭岬）は、長男の長胤（字元蔵<sup>(47)</sup>、号東涯）とともに伊藤家の五蔵と称され、伊藤家の学を世に広めるのに大きな役割を果たしたが、そのことはすでに周知の通りである<sup>(48)</sup>。

ところで、この時期における仁斎の塾の隆盛ぶりを、先述の「行状」は「刺を投じて來謁する者、録に著るゝこと凡そ三千餘人」と伝えているが、その様子は東涯の『<sup>かつしんろく</sup>盍簪録』にも「先人生徒を教授すること、四十餘年。諸州の人、國至らざること無く、唯飛彈佐渡壹岐等、二三州の人、僻遠にして録に著れず。門に及んで謁を執るの士、殆ど千を以て數ふ」（卷之二、紀實篇）とある。現在、古義堂文庫には、仁斎の門人録として『諸生初見帳』（天和元年から貞享三年までの入門来訪者控）、『諸生初見帳』（貞享四年から元禄五年までの入門来訪者控）、『諸生納禮志』（前二書の浄書、ならびに元禄十二年までの入門来訪者控）、『門人録』（元禄十六年から宝永二年まで）の四種類が残されているが、仁斎五十五歳より七十三歳に至る十七ヶ年分のものを記した前者三種類のものだけで七百二十九人の入門来訪者数を録している<sup>(49)</sup>。この数字には、仁斎の名を慕っての一時的な訪問者や臨時の聴講者も含まれていると見なされるが、仁斎の塾の隆盛ぶりを裏付ける資料にはなるであろう。

仁斎の門人たちにどのような出自の人がいたのかについては、前掲の加藤仁平『伊藤仁斎の學問と教育』や石田一良『伊藤仁斎』がすでに詳しい分析を行っているが、仁斎と最も親交の厚かった門人たちの略歴は東涯の『先游傳』（享保十四〈1729〉年刊）によって、ある程度までこれを知ることができる。そこには、「先子と交り且つ従ひし者」のうち、「朝紳（す

なわち公家衆、筆者註)」「交りの浅きと終らざる者」「身今に存する者」「子弟に因て識る者」「予の詳知するに及ばざる者」などを除いた七十九人の門人の名が挙げられている<sup>(50)</sup>。このうち特に注目されるのは、七十九名中実に三十名が医師であったということである(「爲醫」「善醫」「業醫」「醫人」のように「醫」という言葉で紹介されているものに限る。「針科」や「瘍科」はこれに含めていない)。その中には、村上友兇<sup>ゆうせん</sup>のように法印に叙せられたり、有馬良及のように「少壮術以て都下に鳴」った大医もいた<sup>(51)</sup>。医師以外では、士族(致仕者や隠居者を含めて)が十一名ほど数えられるが、その中には、大内義隆の七世孫で膳所藩の重臣山口勝隆や、いわゆる赤穂浪士の一人として知られる小野寺秀和の名も含まれている。儒者も九名(いわゆる藩儒、例えば安東省菴などは儒者として数えた)ほど数えられるが、これ以外では僧侶二名、農家一名を除いて、生業は必ずしも明示されていない。「世京に貫き富戸を爲す」(伊藤素之の項)や「家素豪」(西谷道室の項)、あるいは「江州江部荘の土豪」(北村可昌の項)などの記述から推察するに、豪商・豪農といった富裕層の人々が多く含まれていたように思われる(なお、七十九名の中には、医師大須賀快庵や文人尾形維文など仁斎の親戚筋も含まれていた)。

また、出身地で見れば、当然ながら「京師人」あるいは「京師に住す」「京師に家す」と記されたもの、すなわち京都定住者が三十名に上っている(例えば、「京師に遊ぶ」と記された者はこれには含めていない)。それ以外では「丹州穂(保)津」や「丹州柏原」「大坂」など京都周辺が散見するが、遠方としては「日州延岡」や「羽州秋田」といった地名が目につく。「羽州秋田」の門人である木村立に関しては、「東牘<sup>かんとく</sup>往來、遺を問ひ正を質し、三千里の阻、猶<sup>しせき</sup>を咫尺のごとし」<sup>(52)</sup>と記されていることが特に注目される。

これら門人たちに接する仁斎の態度は「行状」に



其の生徒を教導する、未だ嘗て科條を設け、督察を嚴にせず。而して其の侯國に友教し、邑里を訓化する者、各 其の材を成し、皆人の爲に知らる。平日學者に勸むるに、道術を明し、治體に達し、有用の實材爲るを以てして、空文に驚<sup>は</sup>せ記誦に流るることを戒む。一も字を識らざるの人と雖も、之に告ぐること諄諄反覆、唯其の意を傷ふことを恐る。其の言を聽て各得る所有り。其の文辭理平穩、務めて曉り易きことを欲して、繁文綺語を事とせず。時に宗匠を推し、一篇出づる毎に傳播咀嚼、人<sup>おのおの</sup>以て楷と爲。

と伝えられている。ここに述べられたような、教条主義に陥らず、諄諄然として門人を誘い、しかも時には門人をも手本として互いに学び合おうとする仁斎の姿勢は、『童子問』の中で仁斎自身が語った、「己と議論同じきを悦んで、己が意見と異なるを楽しまざるは、學者の通患なり。學問は切磋琢磨を貴ぶ。己が意見と異なる者に従ひ、己を捨てて心を平らかにし、切劘講磨するに若くは莫し」(『童子問』卷之中、四十七章)、あるいは「師門の教を尊ぶは可なり。師門を私するは不可なり。…學とは、天下の公學、豈に其の門を私す容けんや」(同上、四十八章)という認識にも明示されている<sup>(53)</sup>。

さて「行狀」は、この頃の仁斎の事績について、特に次の三つのことを取り上げている。それらを年代順に整理し直すならば、まず「天和癸亥、稻葉石見侯正休巡察して京に到る。爲に語孟字義を著はす」とある。前述の『日記』にも、天和三年五月二十八日の条に、若年寄稻葉石見守正休に『語孟字義』が、『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』とともに献上されたことが記されている。『語孟字義』は、元禄八(1695)年仁斎に無断で江戸にて贋刻本が刊行されるが、稻葉正休からの依頼といい(因みに『文会雜記』には、「稻葉石見守殿ハ仁斎ノ秘蔵弟子ナリ」<sup>(54)</sup>という記事も見えている)、贋刻本の刊行といい、これらは仁斎の儒者としての名望の高まり

を裏付ける出来事といえるであろう。

第二に、「貞享中、豊の中津の僧道香都に到る。將に歸し文を請はんとす。…此に因て膾炙<sup>かいしゃ</sup>日に盛に、四遠に流布す」とある。ここで中津の僧道香の帰郷に際して送ったとされる仁斎の文は、『文集』卷之一に「浮屠道香師を送る序」（貞享二年乙丑二月六日）として収録されている。その中で仁斎は、儒仏の関係をめぐって

夫れ學者自り之を見れば、固に儒有り佛有り。天地自り之を見れば、<sup>もと</sup>本儒無く佛無く、唯一道のみ。所謂道といふ者、即ち天地の公道にして、一人の得て私する所に非ず。…天地の間、必ず父子有り、君臣有り、夫婦有り、昆弟有り、朋友の交り有り。晨に興きて夜に寐ね、夏葛して冬裘、天子と雖も革むること能はず、聖人と雖も易ふること能はず、古今に亘つて四海に準じ、人心に根ざして、物理に通ず。是れ吾が所謂一道なり。佛と雖も今日の天地を離れて獨り立つこと能はず。則ち知る可し今日の天地を離れて、所謂道なる者無きことを。吾の道、豈二有らんや。

と述べている。当時、儒者の仏教認識は、例えば山崎闇斎(1618-1682)や熊沢蕃山(1619-1691)らの仏教批判に見られるように、それが人倫を否定し空寂の説をいうだけのものだとする点において共通していた<sup>(55)</sup>。仁斎もまた、「盖し釋氏は天下を離れて独り其の身を善くせんことを欲す。…遂に人事を廢して修めず、天下を蔑にして顧みず」（『童子問』卷之下、第二十八章）というように、基本的には仏教に対して批判的立場をとっていた。だが、道香に送ったこの一文では、儒仏を同じ一つの道に帰するものと論じている。もちろん、その道とは人倫の道そのものであり、その意味では、儒仏の対立を超克するような教説が儒学思想の内部に存することを高唱したのがこの一文であったといえる。「行状」に従えば、この一文

は広く流布したが、対馬の医師大塔貞安によって李氏朝鮮にまで伝わり、同国の府使安愼徽がこれを歎賞して国都に持って帰ったと記されている。さらに、元禄末には、このことが宸聴に達し、東山天皇がこの文を求められたので、兵部大輔藤原貞維<sup>さだつな</sup>を介して献上したとも記されている<sup>(56)</sup>。

第三に、「元禄中、鳥居播磨侯忠救<sup>ただひら</sup>の欽待に因て、江の水口に到る者再び、其の論説を聴き、歎異する所多し。爲に其の六世の祖長源侯元忠の墓碑を撰定す」という記事がある。同じく「行状」の、「平生未だ嘗て京邑の外に出ず。唯南京大坂の保津、皆門生の爲に招かる。時に或は一たび至る」という記述に認められるように、仁斎は、その学的活動の大半を京都の地で過ごしたが、元禄年間には鳥居忠救<sup>ただひら</sup>の招きにより、二度ほど江州水口を訪れている。ここに名が上がっている鳥居元忠とは徳川家康の忠臣として周知の人物であるが、そのような人物の墓碑を撰定したことは仁斎にとっても名誉なことであったはずである（この「竜見院鳥居侯墓碑銘」は、『文集』の目録に掲げられているが、本文には「未刻」として収められていない）。なお、前出の加藤仁平『伊藤仁斎の學問と教育』は附録第二として、仁斎水口滞在中の書簡（「古學先生手帖」）を収録しているが、それによれば、水口来訪は元禄九（1696）年九月と同十二（1699）年三月のことで、講義は『童子問』を中心として進めていたことがわかる（墓碑撰定は元禄十二年の来訪時）。この二度の来訪時、仁斎七十歳および七十三歳、嫡男東涯はすでに二十七歳および三十歳に達していた。仁斎の書簡には、水口滞在中は家庭の取り仕切りも塾の運営も一切を東涯に託していたことが記されているが<sup>(57)</sup>、東涯の成長により仁斎は安心して自宅を留守にすることができたのであろう。仁斎には、「人の福に於ける、賢子孫有るより大なるは莫し。而して子孫の賢、書を讀み道を曉し能く父祖の志を承ぐより大なるは莫し」（「一安家訓序」、『仁斎先生文集』、所収）という言葉があるが、この時期の仁斎はすでにこのような意味での幸福を実感していたに違いない。

これまで、仁斎の学塾については、「同志会」や「訳文会」などユニークな研究会が組織されていたことを指摘してきたが、仁斎晩年の元禄六(1693)年に彼はまたしても独自の研究会を組織する。「私試制義会」がそれである。前述のように、「同志会」は仁斎三十代後半から四十歳前後の頃のもので、そこで行われた「策問」は文章よりも思想の構成を重視するものであった。「訳文会」は仁斎五十代後半のもので初歩的な漢文学習を主眼とするものであった。これに対し、「私試制義会」は仁斎六十代後半から七十歳前後にかけてのもので、文章そのものの高度なレベルでの構成能力を重視するものであった。『文集』卷之六にその会式が収められているが、その一部を紹介すると、

孔門言語の科有り。良に以有るかな。<sup>まこと ゆゑ</sup>今私に諸生の爲に、毎月一次、題を出して之を試む。題先づ語孟を用ゐ、次第當に本經に及ぶべし。汝南の許氏に倣ひて、毎月朔日を定めて會日と爲。倘事有れば限を展じ、更に事無きの日を用ふ。會日は、諸生各墨卷を懷にし、案上に置き、卷中姓名を書せず。紙和唐を擇ばず、皆高さ九寸を以て準と爲。和紙を糊して囊と爲て、進呈す。衆中文法に通ずる者数輩を推して參評と爲。參評乃ち案上に就て、手に信て<sup>まかせ</sup>抽取す。毎卷先づ其の得る所の次第を其の上に録して、衆と論議し、定めて後朱筆を用ゐ、略爲めに<sup>ざんてい</sup>竄定す。畢る。之を會長に呈す。會長再び看詳し、刪定青筆を用ふ。如し佳境に値はば、或は圈或は批、其の宜しき所に從て、略其の工拙を議し、或は口づから文を作るの法を授け、甲乙を校せず、次第を分たず、爭端を起すことを恐る。試を以て之を名づくとも雖も、實は課なり。試罷<sup>や</sup>んで、參評其の文を以て各人に附す。諸生<sup>おのおの</sup>各受け歸つて、書寫し冊と爲し、會長に送る。會長再び參評得る所の次第を勘照し、輯めて一冊と爲す。(「私試制義會式」元禄六年甲戌秋九月、『文集』卷之六、所収)

とある。その概要は、①原則として毎月一日を会日とし、事前に仁斎が諸生に論題を与えておく（『論語』『孟子』を用い、次第に五経に移る）、②会日には諸生は各々答案を持参し机の上に置く（姓名は記さない。和紙の袋に入れる）、③文章に長けた者数名が参評となり、手当たり次第に答案を取り、参評間で論議し、評価が定まってから朱筆で文章を改訂する、④会長が改めてこれを青筆で改訂する、⑤参評がこれを諸生に返し、諸生は書写し冊として会長に送る、⑥会長がこれを輯めて一冊とする、というものである。このような研究会方式の塾運営は、同志会以来、仁斎の学塾に一貫するものあった。

こうして仁斎は、七十歳前後に達してもなお精力的に塾活動が続けるのであるが、彼の晩年における日常の様子はどのようなものだったのか。それについて、「行状」は次のように伝えている。

常に字を書することを好んで、未だ嘗て法帖を模臨せず。毎旦晨に起き、先づ几に憑り楷艸數紙を亂書す。家人餐を促すこと頻頻にして始て罷む。<sup>や</sup>率<sup>おおむね</sup>以て常と爲。間意適<sup>かな</sup>ふに遇れば、或は和歌を賦す。眞率興を遣し、巧緻を要せず。常に天氣明媚の候に値<sup>あ</sup>はば、子弟三數輩を拉へ、杖欄原佯、吟詠して歸す。

すなわち、晩年の仁斎は字を書することを好んだが、法帖を臨模したことはなかった。毎日早朝に起きると机に寄りかかって楷書や草書を数枚の紙に乱書し、家人が朝食に何度も呼び立てるまで腰を上げなかった。時に気が向くと和歌を詠んだが、心情を率直に表すだけで巧みさや精緻さを求めはしなかった。また天氣がよいと子弟三、四人を連れて郊外へ散歩に出かけ、詩を吟詠して帰った、というのである。

東涯の『<sup>かつしんろく</sup>盍簪録』にも、仁斎の晩年の様子が、

先人少壯時、曾て飲を解かず。中年以後、醫人の勸強に因り、二三蕉を擧ぐ。晝間は唯二食、夜は復食せず。時に或は酒を飲み微醺<sup>びくん</sup>に至る。予及び一二同舎生侍座す。經を談じ史を論じ、間京師舊俗、先世遺事に及ぶ。毎に予輩に勗<sup>かつしんろく</sup>めて曰く、須く天下第一等の人爲<sup>た</sup>るを以て志と爲すべし。（『壺簪錄』卷之二、紀實篇）

と述べられている。少壯時には酒は飲まなかったが、中年以降は医者<sup>いしや</sup>の勧めで二、三杯盃を傾けるようになった。昼間二食をとるだけで夜には復食しなかった。時に酒を飲んでほろ酔い加減になると、東涯や門弟を側に座らせて、經を談じ史を論じ、あるいは京都の旧俗や先世の遺事を語って聞かせた。そして常に「須く天下第一等の人爲るを以て志と爲すべし」と語っていた、というように東涯は回想するのである。いずれの記事からも、晩年の仁斎の悠々自適の生活ぶりが伝わってくるようである。

仁斎の死について「行状」は、

寶永二年乙酉三月十二日丙午未の時、家に終る。享年七十有九。越て望日己酉、小倉山二尊院<sup>せんえい</sup>先塋の側に葬る。墳の高四尺。以て馬鬣<sup>ばえつ</sup>に擬すと云ふ。私に諡<sup>おくりな</sup>して古學先生と曰ふ。

とだけ記しているが、その最も詳しい経緯を伝えるものは東涯自筆の日記『東涯家乗之二』（古義堂文庫所蔵）である。それによれば、宝永二（1705）年の記事の冒頭に「正月二十二日…飯後先生痰起り…」とあり、続けて「先生痰疾未快…（講尺等延引なり）」と記されている。二月に入ってから、「二月十五日の夕先生食事を困り…」や「十七日又不快…」「十八日の夕より病勢…法印浦野道栄に見せ…十九日より道栄の薬に移し…」「道栄の弟子上崎英庵…毎日昼夜付添…」というような記述が続く。三月に入ると、「禁裏、仙洞（上皇のこと、筆者註）…の御意之有り、道

栄も精出…」三月四日頃殊に快かし」というような記述も見られるようになる。しかし、三月十二日の未<sup>ひつじのこく</sup>刻（現在の午後二時、または、その前後二時間）に到り仁斎は永眠する。葬送は十五日、二尊院に葬られたのは同月二十五日のことであった。東涯の日記には「三月十二日未刻先生<sup>えきさく</sup>易簣す。十五日送葬。廿五日二尊院に葬る」という、簡単な記事が残されているだけである。

## 5. 仁斎の生涯に纏わる補論

最後に仁斎の生涯に纏わる事項について若干の補足を加え、本稿を閉じることとする。

第一に、仁斎という号についてである。「行状」には、「嘗て仁斎と號す。居する所の堂前海棠<sup>かいとう</sup>一株有り。因て又棠隱と號す」とあるが、仁斎はその修学開始当初から「仁斎」の号を使用していたわけではない。承応二(1653)年、仁斎二十七歳のときに書かれた「敬齋の記」(『仁斎先生文集』、所収)には、「敬齋の箴を獲て之を読み、深く懷<sup>こころ</sup>に愜<sup>かな</sup>ふこと有り。…<sup>よつ</sup>繇て併せて其の齋を謂ひ、號して敬齋と爲<sup>す</sup>」と記されており、朱子学に傾倒していた頃の若き仁斎が、朱子の「敬齋箴」を読んで深く感銘し、「敬齋」という号を使用していたことを伝えている（ただし、これは書齋の号と述べられている）。

その後、「敬齋」という齋号は、「行状」の「時に心學原論、太極論、性善論を著す、皆二十八九歳の間に在り。其の居する所、自ら誠脩の二字を掲げて以て自ら<sup>いまし</sup>警む」という記事に従えば、「誠脩」と改められている。このことは、寛文四、五(1664-65)年頃のものと推定される「安東省菴に答ふる書」(『文集』卷之一、所収)の中の、「僕姓は伊藤、名は維貞。書を読むの室、名づけて誠脩と曰ふ」という記述にも認められるところである<sup>(58)</sup>。また、延宝三(1675)年前後の作と推定される仁斎の「同志会筆記」も、その旧名は「誠脩筆記」であったし、仁斎が天和三(1683)年に

稲葉正休に献上した『論語古義』の草稿（古義堂文庫に現存する『論語古義』のうち二番目に古い稿本）巻之六の表紙には「誠修」と記されている。このように、「誠修」の号はかなり長期間にわたって使用されていたようである。

では、「仁斎」の号が使用されるようになったのは、いつ頃のことであるのか。元禄二(1689)年の「堯舜既に没し邪説暴行又作るを論ず」（『文集』巻之二、所収）の跋文末尾には「己巳閏正月驚蟄前一日仁齋跋す」とあり、この時点では「仁斎」と称されていたことがわかる。ただし、それ以前の貞享四(1687)年に佐藤直方(1650-1719)は「伊藤仁齋浮屠道香師を送るの序を辨ず」（関儀一郎編『日本儒林叢書』第四巻、鳳出版、1978年、所収）を著し、一貫して「仁斎」と呼んでいる。これらに基づき、三宅正彦は「仁斎も本来、書斎の号であつたろうし、誠修の号を晩年自称することはまったくなくなるので、誠修と仁斎は同時併存的に用いられたのではなく、前者から後者へと改号されたと考えられる。その時点は天和年間の末から貞享年間の初めと一応推定しておこう」<sup>(59)</sup>と述べている。

こうして、仁斎は五十代後半頃から自らの書斎を「仁斎」と名づけ、これを個人の号としても使用するようになったと推定される。ただし、「行状」にある「棠隱」という号がいつ頃から使われ始めたのか、またそれは「仁斎」から「棠隱」への改号を意味するものであったのか、などについては、その詳細を論ずるための資料が得られてはいない。

第二に、仁斎が開いた私塾の名称についてである。仁斎の塾を「古義堂」と称することは今日では広く了解されているところである。那波魯堂『學問源流』（寛政十一〈1799〉年刊）の「貞享元禄ノ比、京師堀川ノ人、伊藤源助出テ、新義ヲ講ズ。却テ自ラ古義ト云ヒ、其居所ヲ古義堂ト云ヒ、又仁齋ト號ス」という記述や、原念斎『先哲叢談』（文化十四〈1817〉年刊）の「字は源佐、仁齋と號し、又古義堂と號す」<sup>(60)</sup>という記述からすれば、江戸後期には仁斎の塾に「古義堂」という名称を充てるこ



とがすでに定着していたことが窺える。また、『日本教育史資料』卷二十三の「私塾寺子屋表」にも「古義堂」（調査年代は明治二年と記されている）の名称が使用されている<sup>(61)</sup>。

ところが、仁斎自著の文書に「古義堂」という言葉が使われた例は、これまでのところ発見されていない<sup>(62)</sup>。管見の限り、「古義堂」という言葉の初出は、東涯自作の漢詩題目「古義堂前の白櫻に題す並びに序」（『紹述先生詩集』卷之四、所収）においてである。東涯はこの漢詩の中で、「前に長衢を望み、俯して洛川を瞰る。西に白雲の疊翠を矚<sup>み</sup>、南に金城の壮麗<sup>そうれい</sup>を仰ぐ。中に小堂を構へ、扁して古義と曰ふ。堂前方僅かに五畝、白櫻一株、陰四隣を蓋ふ。所謂江戸櫻なる者なり」<sup>(63)</sup>と記するのであるが、この漢詩の草稿は『紹述先生遺墨逐年』（天理図書館古義堂文庫所蔵）に収められており、そこには「元禄八年乙亥」の日付が付されている。少なくともこれによれば、仁斎六十九歳の元禄八（1695）年には、仁斎の塾が古義堂と称されていた可能性があるが、その真相は未詳である。

この私塾が「古義堂」を名乗るようになったことを示す資料は、これまでのところ、享保十四（1729）年に記された東涯の「新修宅記」（『紹述先生文集』卷之六、所収）であるとされている<sup>(64)</sup>。すなわち、それによれば、

予京に家すること既に四世。歳癸丑宅災に燬く。先人草草經營茲に五十七年。時に修葺すと雖も、傾圯腐朽、毎に整頓を煩はす。且つ塾子業を肄<sup>なら</sup>ふに、恒に湫隘を患ひ、久しく改造を圖り、向に南隣の隙宇を買つて客房と為。今茲に門生三数輩舊屋を徹し、新に局面を構ふることを謀り、両を合せて一と為。方一步の者百六十四、南に面して榜して古義と曰ふ。十筵を舗く可し。外十一筵、西南磬折して設けて、以て書を講ずるの所と為。左二室有り、以て賓を欸す。西南廳事四筵、堂に當つて南三室を列ねて塾と為。上樓有り、筵を設ること三十舗な

る可し。二室の東隙地有り。環堵の者二、石盂を置て以て盥に供す。其の東を慥慥齋と為。其の東南厨有り、内寢有り。堂塾の間廊有り、以て厨に達す可し。東北隅祠堂一龕を作て二世を祝ふ。凡そ<sup>はしら</sup>楹を為す、百四十五。書庫舊貫に仍る。工を三月十三日に起して、手を六月廿八日に斷つ<sup>(65)</sup>。

というように、延宝元(1673)年五月の火災以来、五十七年を経過した享保十四(1729)年に塾を新修し、その南面に「古義」と記した額を掲げたというのである。この年の新修に伴って、塾の機構や設備が整ったことは確かであろうし、それを契機に「古義堂」を称するようになったというのは理解できる話である。

ただし、注意すべきは、この享保十四年以前に出版された仁斎の諸著作が「古義堂藏」と柱刻されていることである。後述するように、仁斎の諸著作はその死後に東涯が門人たちと協力して補筆校訂を行った上で刊行されるが、例えば、正徳四(1714)年出版の『中庸發揮』から享保五(1720)年出版の『孟子古義』に至る主要著作には版心に「古義堂藏」の文字が柱刻されている。このことは、享保十四年の塾新修以前にも「古義堂」という言葉が、塾の内部で使用されていたことを示唆するものである。

しかしながら、少なくとも仁斎の生前において、塾名に「古義堂」が充てられていたことを裏付ける資料は得られてはいない。このことからすれば、仁斎生前の頃の学塾のことを「古義堂」と呼ぶことは、実証的な見地からは慎重を要するであろう。

第三に、仁斎の諸著作についてである。これに関し「行状」には、「著する所論孟古義十七卷、中庸發揮、大學定本、周易乾坤古義各一卷、語孟字義二卷、童子問三卷、文集三卷、詩集一卷、春秋經傳通解、日札、極論、讀近思錄鈔、皆書を成さず」と記されている。ただし、これらの諸著作は、「皆書を成さず」とあるように、あるいは同じく「行状」に「凡そ

纂述の書、遂旋修改、未だ嘗て手を停めず。故に其の書未だ嘗て刊刻せず。門人傳録、亦異同多し」とあるように、仁斎の生前に刊行されることはなかった。つまり、仁斎の著作活動とは、著作の稿本を作ってはそれに補筆訂正を加え、それに基づいてまた新しい稿本を作るという作業の繰り返しであった。では、後に仁斎の主著と見なされるような諸著作の起草作業はいつ頃から開始されたのか。

仁斎の「予が舊稿を読む」(『文集』卷之六、所収)によれば、「長胤予が舊作を輯め、予之を読んで憫然たり。某某總て若干篇、皆三十來歳の作る所、…其の他の作皆三十六七歳以内に在り。其の後語孟字義、及び中庸發揮等を艸定す。…其の後三十七八歳…語孟二書を読むに及んで、明白端的、殆ど舊相識に逢ふが若し」<sup>(66)</sup>とある。つまり、仁斎が論孟の二書を学問の指標として定めた時期が三十七、八歳であり、このことからすれば『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』など彼の主著の起草は、この頃すなわち寛文三、四年(1663-64)頃のことであったと見なされる。

ただし、その後の補筆訂正作業は必ずしも各著作ごとに行われるだけではなく、諸著作の稿本を統一的に作成することも行われた。その一つの節目となったものが、前述の天和三(1683)年五月における稲葉正休への著作献上であったと見なされる。というのも、今日古義堂文庫に現存する諸稿本類を見ると、下記の諸著作の稿本が門人中島浮山の筆写により、いずれも天和三年頃かその数年前に作成されているからであり、それらが実際に献上された『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』『語孟字義』の草稿となっていたものと見なされるからである(献上本の筆写は中島浮山とは異なる。なお以下の< >内の表記は、『古義堂文庫目録』に従い、丸数字は現存する稿本の中で何番目に古いものかを示す)。

『論語古義』<誠修校本>②

『孟子古義』<元禄十年重訂本>④

『中庸發揮』<第二本>②〔ただし、稲葉氏への献本の草稿は<第三

本>]

『大學定本』<改修本>①

『春秋經傳通解』<改修本>①

そして、今日仁斎の生前最終稿本として知られるいわゆる「林本」も、元禄末から宝永元(1704)年にかけて、門人林景范によって筆写されたものである。今日古義堂文庫には以下の「林本」が保管されている。

『論語古義』<林本>⑬

『孟子古義』<林本>⑩〔卷之二を欠く〕

『易經古義』<林本>③

『語孟字義』<林本>⑫

『童子問』<林本>⑧

なお、「林本」以外のもので古義堂文庫に現存する仁斎生前最終稿本は、

『中庸發揮』<元禄七年校本>⑤

『大學定本』<元禄十六年冬校本>⑤

『春秋經傳通解』<改修本>①

である。なお、『古學先生文集』『古學先生詩集』『仁斎日札』などの著作は、仁斎がある時期に記した文書を門人たちが筆写したもので、仁斎自身の手になる補筆訂正を経ていない。

最後に、仁斎の没後東涯ら門人たちの手によって刊行された仁斎の主要著作を以下に示しておく。

『語孟字義』二冊<宝永二年>。跋文末に「寶永二年乙酉冬至日門人林景范文進頓首拜書」と記されるだけで、版元・書肆名などを記した奥付はなし。

『童子問』三冊<宝永四年>。跋文末に「寶永四年丁亥重陽日門人林景范文進頓首拜書」とある。版元・書肆名などを記した奥付はなし。

『論語古義』四冊〈正徳二年〉、「京師書坊文會堂奎文館發行」と記した奥付あり。

『中庸發揮』一冊〈正徳四年〉、「正徳甲午新刊京兆玉樹堂發行」の奥付、「古義堂藏」の柱刻あり。

『大学定本』一冊〈正徳四年〉。同上。

『古學先生文集』四冊〈享保二年〉、「享保丁酉新刊京兆玉樹堂發行」の奥付、「古義堂藏」の柱刻あり。

『孟子古義』〈享保五年〉、「享保庚子新刊京兆奎文館發行」の奥付、「古義堂藏」の柱刻あり。

なお、現存する仁斎の諸著作に関し、その詳細については『古義堂文庫目録』所収の「仁齋書誌略」を参照されたい。

#### 【註】

##### ＜仁斎関係資料について＞

本稿において使用した「仁斎関係資料」（いずれも、天理大学附属天理図書館古義堂文庫所蔵）は次の通りである。

##### ・仁斎の自著・草稿類

『誠修筆記』（一冊、延宝頃）、『仁齋先生文集』（一冊）、『古學先生文集』（底本、五卷五冊、正徳四、五年頃）、『諸生初見帳』（二冊、延宝九年～貞享三年のものと、貞享四年～元禄五年のものの二種類あり）、『童子問』（林本、三卷三冊、宝永三、四年頃）、『語孟字義』（林本、二卷二冊）。

##### ・東涯の自著

『伊藤氏族図』（一冊）、『家系略草』（一卷）、『家世私記』（一冊）、『壺簪録』（四卷四冊、享保元年～八年頃）、『東涯家乗之二』（『伊藤氏家乗』七冊のうちの第二冊、元禄十六年～宝永七年）

- (1) 公刊された「行状」には、東涯や仁斎の門生たちによって編まれた『古學先生碣銘行状』（林文會堂藏版、宝永四年刊）収録のものと、同じく東涯らによって刊行された『古學先生文集』（古義堂藏版、享保二年刊）「卷之首」収録のものと二種類がある。だが、例えば「心學原論」「太極論」「性善論」など若き日の仁斎の著作について、前者が「皆二十六七歳の間に在り」と記

すのに対し、後者は「皆二十八九歳の間に在り」と記すように、両者の内容は必ずしも同一ではない。従来までの代表的な仁斎研究書が利用してきたものが『古學先生文集』所収のものであること、またこちらの方が、刊行された年代が新しく、その分史料批判を経てある可能性があり得ることなどから、本稿では「行状」として『古學先生文集』所収のものを使用することにする。なお、『古學先生碣銘行状』は、その中に附録として荻生徂徠が晩年の仁斎に寄せた書簡が無断で掲載された曰く付きの書である。

- (2) 周知のように、仁斎の各種手稿本を含む古義堂の資史料は、昭和に至るまで伊藤家に伝えられたが、1941年に天理図書館に譲渡され、それ以後は同図書館古義堂文庫に収蔵されている。詳しくは、天理図書館編輯『古義堂文庫目録』天理大学出版部、1956年、を参照されたい。
- (3) 石田一良『伊藤仁斎』吉川弘文館、1960年、7-8頁、および、三宅正彦『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』思文閣、1987年、73-75頁、を参照のこと。
- (4) 同上。

なお、『伊藤家系譜』では、了雪はその住所が道慶と同じとされ、道慶の住所については「和泉州堺津に住す」と記されている。

- (5) 詳しくは、前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、74頁、を参照のこと。
- (6) 諸橋轍次他『廣漢和辭典』上巻、大修館書店、1981年、1206頁。
- (7) 大日本文庫儒教篇『先哲叢談』春陽堂書店、1936年、82頁。
- (8) 井上哲次郎『日本古學派之哲學』富山房、1902年、136頁。
- (9) これについて詳しくは、前掲の石田一良『伊藤仁斎』、165-193頁、を参照されたい。

また、三宅正彦によれば、伊藤家は仁斎当時「東堀川四丁目」に所在したが、この地は「材木町」と通称されていたことが指摘されている（前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、75頁）。

なお、仁斎の祖父了慶の実家は在地小領主層であったと推定され、了慶が京都に構えた屋敷には堀川通の本宅の他、丸田町堀河東南畔と堀河西畔にそれぞれ別宅があった。了慶の頃の伊藤家はまさに上層町衆に属する家であったと見なされる。ただし、了室の代になると、家業に関わる具体的な事跡が伝わらなくなる。家業の衰退がその理由の一つとして考えられ得る。詳しくは、『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、85-86頁、を参照のこと。

- (10) 同前『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、78-79頁。
- (11) 『誠脩筆記』四十條の「余十六七歳の時、朱子四書を讀んで、窃かに自から以為らく是れ訓詁の学、聖門徳行の學に非ずと。然れども家に他書無し、語

## 伊藤仁斎の生涯と教育活動に関する素描

録或問近思録性理大全等の書，尊信珍重す」という記述に基づく。

(12) 前掲，石田一良『伊藤仁斎』，16 頁。

(13) 伊藤梅宇著・亀井伸明校訂『見聞談叢』岩波書店，1940 年，73 頁。

(14) 前掲，石田一良『伊藤仁斎』，25-26 頁。

なお，仁斎の母方の親戚に関する記事は，多くを同書 18-26 頁，に依拠した。

(15) 湯浅元禎『文會雜記』（『日本隨筆大成』第 14 卷，吉川弘文館，1975 年，所収。なお原本の刊行は天明二〔1782〕年），202 頁。なお，同書には「春台云，東涯ハ至テ温厚ナル人ナリ。仁斎モシカナリ。但仁斎ノ眊子ノ明ナルコト，所謂眼光射人也。學問ニテネリツメテ徳ヲナシタル人ト覺ユ。定テ圭角アリタル人ナラメ，随分ヤハラカナル人ナレドモ，キハメテ英氣ナル人ナリト，語ラレタルト也」（258 頁）という，太宰春台による仁斎評も載せられている。

(16) 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』，136 頁。

(17) 伊藤東涯『先游傳』（『日本儒林叢書』第十四卷，鳳出版，1978 年，所収），23 頁。

(18) 前掲『見聞談叢』，65 頁。

(19) 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』，137 頁。

(20) これについて「行状」には，「時に儒學未だ盛ならず。其の學ぶ者，専ら詞賦記誦を以て務と爲て，道學を講ずる者稀なり。故に親舊知識，多く勸む醫と爲るのは售れ易からんと。催督甚だ苛にして，先生のみ聞かざるが若し」と述べられている。ただし，「行状」ではこれは仁斎の隱居後の記事となっている。

(21) 「行状」にも，「時に李延平問答を購て之を読む。熟復釋せず，紙爲に爛敗す。是自り心を伊洛の學に覃す。専ら性理大全朱子語類等の書を読み，日々研磨す。時に心學原論，太極論，性善論を著す，皆二十八九歳の間に在り。其の居する所，自ら誠脩の二字を掲て以て自ら警む」と，これと同じような趣旨の記事が載せられている。

(22) これについては，①加藤仁平の「病と称して人を避けた」とする説（前掲『伊藤仁斎の學問と教育』，35-36 頁），②石田一良の心臓病もしくは肺病説（前掲『伊藤仁斎』，36-37 頁），③三宅正彦のノイローゼ説（前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』，148 頁），など諸説がある。なお『廣漢和辭典』は「羸疾」を「衰弱して病気になる」と説明している（前掲『廣漢和辭典』下卷，大修館書店，1982 年，268 頁）。

(23) 井上養白について，伊藤東涯はその『先游傳』の中で「丹州穗津の人。醫業

を有馬玄哲に受け、遂に僧と爲る。後越藩に宦し、大安侯に事ふ。…先子少壯時、…日夕會集し、互に相切劘す」と述べている（前掲『先游傳』、1頁）。

- (24) 後年仁斎は、白骨觀法について回顧して「白骨を觀する法とは靜坐して自己の一身をおもふ。工夫熟する時皮肉悉く脱露して只白骨はかりあるやうにミゆるとなり。…僕會てわかゝりし時此法を脩し侍り候。工夫熟して後は、自己の身白骨にミゆるのミならず、他人と語るにも白骨と對談するやうにおもはれ、道行人も木偶人のありくやうにミゆ。万物皆空相あらはれて、天地もなく生死もなく、山川宮殿までも皆まほろしのやうに思はれ侍候。かれかいはゆる明心見性の理に自然に符合せり。孝弟忠信などハ皆甚だ浅くしていふにたらぬやうに覺へ侍り」（「防州太守水野公を送る序」＜天理図書館古義堂文庫所蔵、稿本『仁齋先生文集』所収＞）と述べている
- (25) 太宰春台『聖學問答』（『徂徠学派』＜日本思想大系 37＞、岩波書店、1972年、所収）118頁。
- (26) テキストには、那波魯堂『學問源流』崇高堂藏板、寛政十一（1799）年五月刊本（慶應義塾大学図書館所蔵）を使用した。
- (27) 前掲『日本古學派之哲學』、197-213頁、を参照のこと。  
 なお、呉廷翰の思想については、容肇祖/荒木見悟・秋吉久紀夫共訳『新版明代思想史』北九州中国書店、1996年、も参照されたい。
- (28) 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、151-165頁、を参照のこと。
- (29) 加藤友康他編『日本史総合年表』吉川弘文館、2001年、373頁。
- (30) 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、81頁。
- (31) 仁斎は後に、「道統の圖は、近世の陋儒者宗派の圖を模して作る所、聖人の意に非ず。禪家的傳の若き、是れ天下の道を私して、一家の者と為る者なり。夫れ道の人に在る、猶を日月の天に係るがごとし。目有る者は能く觀る。豈に己が物と為て、私に相付授することを得んや」（『童子問』卷之下、第二十九章）と述べて、「歷代聖賢道統図」を批判するようになる。石田一良によれば、時期を知る史料はないが仁斎は後に「歷代聖賢道統図」を「孔子像」に取り替えたという（前掲、石田『伊藤仁斎』45頁）。
- (32) 「行狀」の記述に従うならば、「大學は孔氏の遺書に非ざるの辨」の成立は仁斎が帰宅した36歳頃のことになるが、その真偽は必ずしも明らかではない。

なお、同じく『語孟字義』卷之下所収の論考に「堯舜既に没し邪說暴行又作るを論ず」（元禄元年戊辰仲秋日）がある。これは、元禄元（1688）年戊辰仲夏念四日（五月二十四日）の「私擬策問」に対する仁斎自身の解答であっ



## 伊藤仁斎の生涯と教育活動に関する素描

たと見なされる。元禄年間には同志会すでに閉会の状態にあったが、「策問」という手法は仁斎の塾において長く採用され続けたのであった。

- (33) 『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』の最初の稿本成立時期については必ずしも判然としていない。これについて、加藤仁平は「大體四十歳頃までに最初の草稿の概略が出来上つたのを、爾後四十六七歳に至る頃まで日々門弟と共に討論推敲して行つたものであらうかと思ふ」（前掲『伊藤仁斎の學問と教育』、41 頁）と述べ、また三宅正彦は「寛文二、三年ごろから起草しはじめて、寛文六年ごろにはすくなくとも『論語古義』の第一草稿を書きあげたと思われる」（前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、170 頁）と指摘している。
- (34) 前掲、『伊藤仁斎の學問と教育』、92-93 頁。
- (35) 「古今人物表」については、班固撰『漢書』（全八冊）、第二冊、中華書局出版、1962 年、861～954 頁、を参照されたい。なお、そこでは古今の主要人物が「上上（聖人）」「上中（仁人）」「上下（智人）」「中上」「中中」「中下」「下上」「下中」「下下（愚人）」の九等に分けられている。因みに、孔子およびその門人でいうと、孔子が「上上」、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓が「上中」、子貢・季路・子游・子夏らが「上下」とされている。
- (36) 范曄撰『後漢書』（全六冊）、第四冊、中華書局出版、1965 年、2235 頁。
- (37) 咸宜園での月旦評について詳しくは、海原徹『近世私塾の研究』思文閣、1983 年、62-78 頁、を参照されたい。なお、同書によれば咸宜園での月旦評の初出は、淡窓がまだその学塾を成章舎と名乗っていた文化二（1805）年のこととされている。仁斎が「同志會品題式」を著した寛文七（1667）年のほぼ 140 年ほど後のことである。
- (38) 東涯の生没年については、『紹述先生文集』所収の「紹述先生伊藤君碣銘」（内大臣藤原常雅筆）に「寛文庚戌四月二十八日に生まれ、元文紀元七月十七日己酉に死す」と記されている。なお、同文集について、本稿では、三宅正彦編集・解説/伊藤東涯著『紹述先生文集』（『近世儒家文集集成』第四卷、ぺりかん社、1988 年、所収）を参照した。
- (39) 仁斎と朱舜水との関係について、詳しくは、前掲石田一良『伊藤仁斎』、58-65 頁、を参照されたい。
- (40) 原念齋『先哲叢談』（大日本文庫儒教篇）春陽堂、1936 年（原著の刊行は 1815～16 年）、86-87 頁。

なお、『文会雜記』には、年代は未詳ながら「仁斎ヲ紀州ヨリ千石ニテ召サレケル時、辞シテユカズ」と（前掲『文会雜記』、185 頁）と記されている。

- (41) これについては、前掲石田一良『伊藤仁斎』、69頁、も参照されたい。
- (42) 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、180-181頁、を参照。なお、同書によれば、『誠修筆記』の四分の三は、延宝三(1675)年仁斎四十九歳のときに成立したとされている。
- (43) 両者はその後再編されて、天理図書館善本叢書『仁斎日記』天理大学出版部、1985年、として刊行されている。同書では、『日次之覺帳』が「仁斎日記上」と、『日次』が「仁斎日記下」と再編され、日野龍夫による解題が附されている。本稿において引用した仁斎の日記記事はすべて同書に依拠している。

なお、古義堂文庫には、これ以外に『家乗』および『毎日記事簿』という仁斎の元禄十年代の日記が保管されているが、両者ともその記事は極めて断片的である。

- (44) 仁斎と公家との交流の深さを示すものとして、例えば、天和二年一月十三日の記事に「今日礼被出候、…西園寺殿、七条殿、花山殿、菊亭殿、伏原殿…」というものがある。正月の行事として公家たちが町衆と同様に仁斎家に礼に訪れていたのである。この他、天和三年二月九日の「立太子節ニ源藏善七めしつれ禁中へまいり候」との記事によれば、仁斎は子どもを伴って立太子節会を参観していた。また、天和三年末の「西園寺殿へ参候。年號改元之談合也」(十一月二十一日)、「西園寺殿へ日暮ニ参候。年號改元定辭之御相談御座候」(十二月八日)、「西園寺殿へ年號改元之定辭代作いたし遣申候」(十二月十日)などの記事は、仁斎が公家方より改元の定辭の代作を依頼されたことを伝えている。
- (45) 詳しくは、武田明子「近世京都における町会所の役割」(『奈良史学』第17号、奈良大学史学会、1999年、所収)を参照されたい。なお、三宅正彦も「町会所は、一種の文化的施設として機能し、仁斎は、町衆の一員として学問上もそれを利用していたのである」(前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』、250頁)と指摘している。
- (46) 前掲『見聞談叢』、251頁。
- (47) 東涯の字は、『紹述先生文集』所収の「紹述先生伊藤君碣銘」には「先生、名は長胤、字は元藏、慥慥齋と號す。東涯も亦た其の自ら號する所」と記されている。ただし、仁斎はその『日記』において、「拙者并ニ源藏、…勘解由小路殿へまいり夕飯ヲ食申候」(天和三年四月二日)、「源藏致同道、九条大納言へ参、論語八之篇林放問禮之本章相濟候」(同年八月廿七日)のように、専ら源藏と記している。
- (48) これについて、『先哲叢談』は「仁斎、五丈夫あり。長は源藏、次は重藏、

次は正藏，次は平藏，次は才藏，人呼んで伊藤の五藏と稱す．皆以て其の家學を世世にするに足る」（前掲『先哲叢談』，95 頁）と述べている．周知の通り東涯（源藏）は伊藤家を嗣ぐが，重藏以下の四人については、『家世私記』所収の「先祖妣惠茲孺人瀬崎氏碣銘」に「長英は福山に仕へ，長衡は高槻に仕へ，長準は久留米に仕へ，長堅は紀に仕ふ．皆，儒を以て顯る」とある．

- (49) 集計された数字は，前掲『伊藤仁斎の學問と教育』，180-181 頁，の図表に依る．

なお，加藤は同書の中で「この十七ヶ年だけでも七百二十九人を録してゐるから，その一代七十九年間には三千餘人の來謁はあつたことゝ思はれる」（157 頁）と述べている．

- (50) 前掲『先游傳』先游傳叙，1-2 頁．  
(51) 同前『先游傳』，4 頁および 7 頁．  
(52) 同上，24 頁．  
(53) このような仁斎の姿勢を物語るものとして、『先哲叢談』には次のようなエピソードが伝えられている．すなわち，当時いわゆる南学派の儒者大高坂芝山が『適從録』（関儀一郎編『日本儒林叢書』第四卷，鳳出版，1978 年，所収）を著し，仁斎の『語孟字義』を批判した．これに対して門弟たちは，仁斎に反駁書を著すべきだと迫ったが，仁斎は笑って取り合わなかった．それならば自分たちで反駁を試みようとする門弟たちに対して，仁斎は「君子は争ふ所なし．若し彼果して是にして我果して非ならば，彼は我に於て益友たり．如し我果して是にして彼果して非ならば，他日彼其の學長進せば，則ち當に自ら之を知るべし．小子宜しく深く戒むべし．學を爲すの要は唯，心を虚しくし氣を平かにし，己の爲にするを以て先と爲す．何ぞ彼を毀り我を立て，徒らに茲の多口を増さん」（前掲『先哲叢談』，83 頁）と述べた，というのである．  
(54) 前掲『文会雜記』，298 頁．

なお，この箇所では稲葉正休に関して，「堀田筑前守殿ヲ刺殺サレシ前ニ，語孟字義ノ書写本ヲ封ジテ，筐中ニイレヲキテ，没後ニ仁斎ヘモドサレタルトナリ」と述べられている．

- (55) 例えば，山崎闇斎は「天地之心万物ヲ生々スルヲ常トセリ．其両間ニ生ジテ，其理ヲ稟得テ生ズル人間ナレバ，人倫生々シテ相續スルハ，正道ニ非ズシテ，如何トカ云也．仏氏此道ニ背テ，先ヅ夫婦婚合ノ次デヲ断ツ．故父子モナク，且兄弟モナシ．若夫婦和号ノ道ナキコト五六十年ニ及バヽ，世界ニ人種ト云物スキト絶ヘ果テ，暗夜ノ如クニ成リ，彼ガ道ヲ施シ，法ヲ伝ヘン

人カラガ無く成ベシ。而ラバ釈氏ノ道ハ殄滅シ尽シテ，世ヲ鴻濛ノ未判ニ移シ替ヘントスルト見ヘタリ」（『敬斎箴講義』＜日本思想大系 31『山崎闇齋学派』岩波書店，1980年，所収＞83-84頁）と述べ，また，熊沢蕃山も「仏氏の徒，五倫を離れ五等を出て，学にのみかゝり居者は，それを常とすれば格別の事也。五倫に居て五等を行ものは，をのをのつとめあり」（『集義和書』＜日本思想大系 30『熊沢蕃山』岩波書店，1971年，所収＞187頁）と述べている。

なお，江戸時代の儒仏論争については，今井淳・小澤富夫編『日本思想論争史』ぺりかん社，1982年（新装版，初版は1979年），149-173頁，を参照されたい。

- (56) この「浮屠道香師を送るの序」に対し，佐藤直方(1650-1719)は貞享四(1687)年に「伊藤仁齋浮屠道香師を送るの序を辨ず」（関儀一郎編『日本儒林叢書』第四卷，鳳出版，1978年，所収）を著し，仁齋批判を展開している。
- (57) 前掲『伊藤仁齋の學問と教育』，856-873頁。なお本文中の記事は，143-144頁，および217頁，を参照のこと。また，これに関しては加藤仁平「伊藤東涯に於ける仁齋學の發展」（大塚史学会編『三宅博士古稀祝賀記念論文集』岡書院，1929年，所収）も参照されたい。
- (58) 前掲の石田一良『伊藤仁齋』には，安東省菴宛の朱舜水の書簡が紹介されているが，そこで舜水は，「伊藤誠修は誠に貴国の翹楚なり」「伊藤誠修は，学識文品，貴国の白眉たり」「伊藤誠修兄の策問は甚だ佳し」などと，仁齋のことを「伊藤誠修」と呼んでいる。詳しくは同書，60-64頁，を参照されたい。
- (59) 三宅正彦「『古学先生詩文集』解説・解題」（『古学先生詩文集』近世儒家文集集成第一卷，ぺりかん社，1985年，所収），8頁。
- (60) 前掲『先哲叢談』，82頁。
- (61) 文部省編『日本教育史資料』第八冊，臨川書店，1970年復刻版，190頁。
- (62) 石田一良によれば，仁齋は延宝五（1677）年五十一歳の頃，自らの講席を「水哉閣」と号したとされる（前掲，石田一良『伊藤仁齋』，70頁）。ただし，いつ頃までこの呼び方が続けられたのかについての言及はない。

なお，同年に仁齋が作った漢詩に「水哉閣に題す」（『古學先生詩集』卷之一，京兆玉樹堂発行，享保丁酉〈1717年〉刊，所収）というものがある。そこには「水なる哉水なる哉，仲尼稱す。水を取るの意，太だ遽い哉。千古萬古流れて已まず。悠悠瀉瀉復た洄洄。閣中の遺老，貧ふして能く楽しみ，岸上の遊人，去て又來たる。几を置き書を藏め，還た酒を蓄ふ。時時莊誦し

- て且つ杯を銜む<sup>ふく</sup>」とある。
- (63) 前掲『紹述先生文集』, 625 頁.
  - (64) 中村幸彦「古義堂雜記」(『中村幸彦著述集』第十一卷, 中央公論社, 1982 年, 所収), 188 頁.
  - (65) 前掲『紹述先生文集』, 160-161 頁.
  - (66) この引用文中にある「語孟字義」は, 「語孟古義」の誤りと思われる. そのことは, すでに加藤仁平(前掲『伊藤仁斎の學問と教育』, 38 頁)や三宅正彦(前掲『古学先生詩文集』解説・解題, 24 頁. および, 前掲『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』, 170 頁)が指摘している通りである.